



〈JMMA第16回大会第2日目から〉

## 目次

### 【特集】

#### 〈会員研究発表〉

学校と博物館を「つなぐ人」の養成 —国立科学博物館における教育ボランティア活動の新たな展開— 国立科学博物館 事業推進部 学習企画・調整課 島 絵里子・岩崎 誠司・吉田 聡宏・永山 俊介・小川 義和 ……	2
博物館に興味を持つ市民に関する調査手法の提案 —博物館ブログの解析— 慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究所研究員 本間 浩一 ……	4
科学館におけるリピーターの分析に関する調査研究 公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館 中村 隆・高原 章仁・田代 英俊 ……	8
「ミュージアム県・ながさき構想」の策定に携わって 文化環境研究所 高橋 信裕・田中 撰・山城 弥生・佐竹 和歌子 ……	10
歴史的建築物の博物館化における研究 —シンガポールの事例について— 常磐大学大学院人間科学研究科博士後期課程 邱 君妮 ……	14
つなげる鑑賞法を利用した博学連携授業の実践 総合研究大学院大学 奥本 素子 ……	19
長崎歴史文化博物館における地域連携・教育事業の成長プロセスのモデル化 長崎歴史文化博物館 教育グループ 竹内 有理・加藤 謙一・久保 憲司・下田 幹子・一瀬 勇士 ……	22
映画に見るミュージアム 文化庁文化財部美術学芸課長 栗原 祐司 ……	24

#### 〈アフタヌーンミュージアム〉

福岡市内3大学博物館見学 報告 JMMA事務局 齊藤 恵理 ……	28
----------------------------------	----

### 【新刊紹介】

『ハウス・オブ・ヤマナカ〜東洋の至宝を西洋に売った美術商』 乃村工藝社 山中 一文 ……	30
--	----

【インフォメーション】 ……	31
----------------	----

**特 集**

去る6月4日(土)・5日(日)に九州産業大学にて開催いたしましたJMMA第16回大会「ミュージアム・リテラシー—博物館職員の役割と地域連携・国際化—」を前号と今号の2回にわたり特集して報告します。

**会 員 研 究 発 表**

## 学校と博物館を「つなぐ人」の養成 —国立科学博物館における 教育ボランティア活動の新たな展開—

国立科学博物館 事業推進部 学習企画・調整課

島 絵里子・岩崎 誠司・吉田 聡宏  
永山 俊介・小川 義和

### 1 はじめに：「つなぐ」

#### —来館者と展示・資料、学校と博物館—

Hein (1998)<sup>1)</sup>によれば、来館者は博物館で意味を創出し、来館者自身の理解を構成することによって学ぶ。来館者の学びを促すためには、来館者と展示をつなぐ仕組みを築く必要があるという。

博物館には、個人や家族連れなどのほかに、学校団体も多く来館する。学校と博物館の連携には、博物館側では、博物館ならではの体験学習プログラムをもつことが大切であること、子どもの対応には特別な知識や経験が必要であること、博物館が学校の利用にこたえる体制をもつことが必要であることが布谷 (2005)<sup>2)</sup>によって指摘されている。また、小川 (2010)<sup>3)</sup>によれば、学校と博物館が継続的に連携し、学習活動を展開するには、両者を「つなぐ人」が重要な役割を果たすと考えられるという。平成19年度に告示された学習指導要領では、理科や総合的な学習の時間などで、博物館などの積極的な連携を促す記述がみられる。今後、学校と博物館がさらに協力を深め、来館者と展示をつなぐ仕組みを築くことで、子ども、教員、ボランティア及び博物館職員が、博物館で共に学び合うことが期待される。

そこで、国立科学博物館では、子ども(来館者)と展示・資料をつなぎ、学校と博物館をつなぐ仕組みの一つとして、「つなぐ学習プログラム」の開発、実施及び「つなぐ人」の養成(学校教員のミュージアムリテラシーの涵養<sup>4)</sup>および博物館ボランティアの養成)に取り組んでいる。本報告では、「つなぐ人」の養成を目的として開始した、国立科学博物館教育ボランティアの新たな「学校連携ボランティア」

活動を紹介する。

### 2 「つなぐ人」養成研修の概要

学校連携ボランティア(以下：ボランティア)の養成においては、国立科学博物館、流山市教育委員会、流山市立向小金小学校の平成22年度連携モデル事業『みつける・しらべる・伝える—向っ子夢ミュージアム—』<sup>5,6)</sup>をボランティア研修の機会とし、子どもたちの調べ学習を支援する活動を行った。また、活動の事前、事後、およびその期間内に研修会を行った。

事前研修会においては、国立科学博物館のこれまでの学校連携の取り組みや、学校連携ボランティア活動を始めるねらいについて説明した後、「子どもの疑問や興味を引き出し、展示・資料の観察や、子どもの日常につなげるには」をテーマに、ワークショップ「聴く&引き出す・つなげる」を行った。実際に博物館に来た子どもの展示に関する質問をもとに、ボランティア2人1組で大人役、子ども役になり、お互いにやりとりをしながら、子どもの疑問や興味を引き出す方法を見出し、参加メンバーで共有していった(図1)。



図1 ボランティア研修でのワークショップ  
「聴く&引き出す・つなげる」

子どもの来館日には、ボランティアは、子どもたちの調べ学習のテーマや疑問を聞き、一緒に展示を観察し、子どもの興味をさらに引き出していった(図

2)。子どもたちは、ボランティアと対話を重ねることで、展示を深く観察し、考え、学校に戻っては



図2 ボランティアと子どもが対話を重ね、展示を深く観察した



図3 小学校にも出向き、ふりかえりや課題整理をサポートした

ふりかえり次回博物館で調べたことを整理するというように、学習を続けた。また、ボランティアが小学校にも出向き、ふりかえりや課題整理をサポートした(図3)。最後の来館日には、子どもたちは博物館の各展示の前で学習成果を発表し、友人やボランティア、教員に、学んできたことを伝えた。

事後研修会においては、ボランティアが半年間の活動をふりかえり、得られたことや課題を互いに共有した。また、小学校内で実施した研修会においては、理科や算数の授業見学や、教員との交流会を通して、学校の教育活動に関する理解を深め、教員が子どもと接する際に大切にしていることを聞いた。

### 3 成果と課題

ボランティアからは、「子どもの学習を支援することで、子どもの視点、疑問が刺激となり、自分自身が楽しみながら学んだ」という声や、「研修時に示された子どもへの対応の仕方は、通常のボランティア活動に有効に生かせる」、「継続して見学する、テーマをもって見学するとはこんなに有益なのだとよく分かった」との感想が寄せられた。また、今後も継続して学校連携ボランティア活動に取り組みたいとの声が多く出ており、ボランティアが学校と博物館を「つなぐ人」として活躍できるよう、引き続き活動の場をつくり支援していく。さらに、今回の事前研修が有効だったとの声や、「ただ教えるだけでなく、(子どもの)考えを引き出していくところが難しい」との声も複数出ており、継続的な研修を行う。

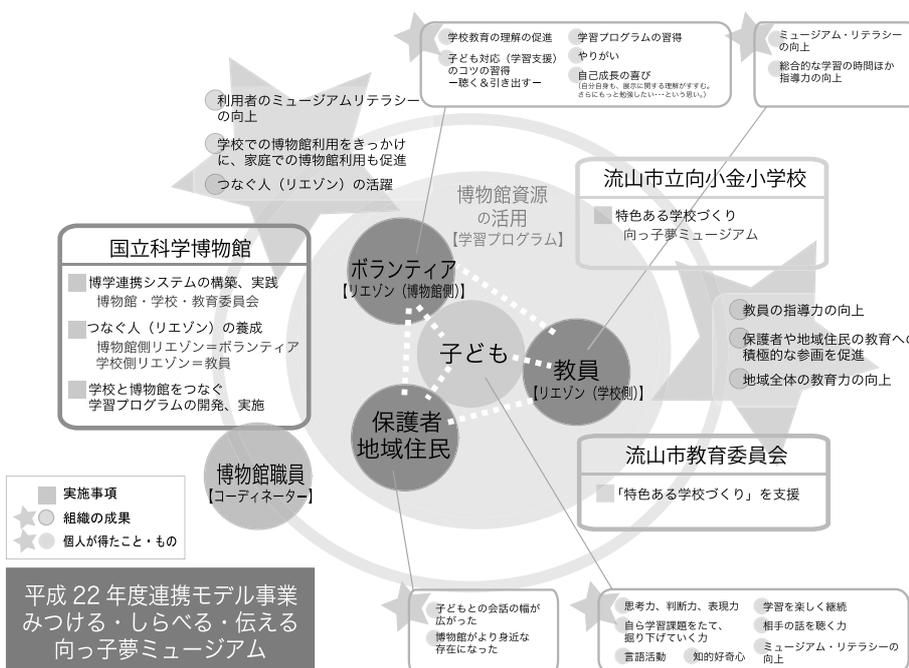


図4 平成22年度連携モデル事業『みつける・しらべる・伝える ー向っ子夢ミュージアムー』での実施事項と成果

「つなぐ人」の養成研修においては、(1)博物館教育の特性をふまえた博学連携のねらいの理解、(2)学校の教育活動の理解（学習指導要領等）、(3)子どもとの対話（子どもの疑問や興味を引き出し、展示・資料の観察や、子どもの日常につなげる）、(4)「つなぐ学習プログラム」の習得、という内容で整理し、今後はさらに研修内容を精査していきたいと考えている。

#### 4 まとめ

子ども（来館者）と展示・資料をつなぎ、学校と博物館をつなぐ仕組みの1つとして、「つなぐ人」—学校連携ボランティア—の養成に取り組んだ。「つなぐ人」の養成研修において、ボランティアは子どもと対話を重ね、展示・資料を共に深く観察し、子どもの興味を引き出し、学習をサポートした。今後も、ボランティアが「つなぐ人」として活動することで、子ども、教員、ボランティアが博物館で共に学び合うことが期待される。

なお、本ボランティア養成研修を行った平成22年度連携モデル事業『みつける・しらべる・伝える—向っ子夢ミュージアム—』の実施事項及び成果（図4）の詳細は、報告書<sup>5)</sup>をご参照頂きたい。

#### 参考文献

- 1) George E. Hein (1998) Learning in the museum. Routledge.
- 2) 布谷知夫 (2005) 博物館の理念と運営—利用者主体の博物館学. 雄山閣.
- 3) 小川義和 (2010) 新学習指導要領と博物館の利用. 博物館研究. Vol.45 No.1 pp.2-5.
- 4) 小川義和 (2010) 「教員のための博物館の日」の取り組み. 博物館研究. Vol.45 No.11 pp.6-8.
- 5) 国立科学博物館 (2011) 平成22年度国立科学博物館・流山市立向小金小学校連携モデル事業「みつける・しらべる・伝える—向っ子夢ミュージアムわくわくたんけん隊—」実施記録.
- 6) 島絵里子 (2011) 「博物館を効果的に見学するには」国立科学博物館編著『授業で使える！博物館活用ガイド—博物館・動物園・水族館・植物園・科学館で科学的体験を』少年写真新聞社. pp.14-19.

※本発表は平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)「博物館リエゾンの養成プログラムの開発と体系化に関する実践的研究」(課題番号23501231、代表：永山俊介)の支援を受けて行った。

## 博物館に関心を持つ市民に関する調査手法の提案

### —博物館ブログの解析—

慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究所研究員

本間 浩一

#### 1 背景と目的

博物館に来館する市民の研究には長い歴史があり多くの知見が積み重ねられている。調査事例の多くで、主な対象は来館行動であり、視点は博物館側である。しかし、「博物館に関心を持つ市民」について多視点で考えるには、市民個人の視野を起点とした調査や、単発の訪問行動ではなく個人単位の時系列に関する調査も必要である。

一方、インターネット等の新しいコミュニケーション手段が、近年急速に市民社会に普及してきている。一般市民が博物館や展覧会の存在と価値を知り自ら参加・貢献するためのツールとしてインターネットは大きな可能性を持っている。博物館を利用する市民の一部は、既に自ら運営するブログを使って積極的に博物館に対する感想・評価等を記事として公開している。

今回、従来の来館者研究とは別の角度からの市民に対する調査手法として、インターネット上に公開された情報に基づいて「博物館に関心を持つ市民」を調査対象として抽出し、分析を試みた。

#### 2 研究対象としてのブログへの着目

調査対象としたのは、主に市民が個人的に運営するブログの中で、博物館・展覧会に関する訪問の記録・感想や批評などを記事として掲載しているものである。これらを「博物館ブログ」、その運営者を「博物館ブロガー」と呼ぶことにする。具体的なデータの収集と分析には、商用のブログ情報サービス「blogram<sup>1)</sup>」を運営する企業の協力を得て、当該サービスに登録・蓄積されたブロガーと記事の情報を使用した。

調査としては第一に、記事データと博物館名称の突合せによって「博物館ブログ」の識別を行った。突合せに用いた博物館の名称については、日本の博物館のリストを網羅的・広範囲に調査・公開しているウェブサイト「インターネット・ミュージアム<sup>2)</sup>」(丹青グループ運営)の掲載データ約8,000件を元で

ータとした。第二に、登録された情報に基づき博物館ブロガーの属性に関する分析を行った。第三に、本調査方法の有効性を確認するために博物館ブロガーに対するインタビュー調査を行った。

### 3 調査概要

#### (1) 調査方法

##### ① 対象としたブログ

第1段階として、“blogram”が収集・蓄積したブログ情報の中で、「博物館」・「美術館」等7つのカテゴリーに分類されたブログを抽出した。各カテゴリーの基本的な抽出条件はカテゴリー名を含むブログページが存在することである。第2段階として、個別の博物館名称がそのブログ内のページ中に含まれているブログを抽出した。

##### ② 博物館の名称

個別の博物館名称として、日本国内と海外の博物館の名称の一覧を準備した。第1回調査では国内分のみとし、第2回は海外分を付加した。

#### (2) 調査日程

突き合わせ作業は2回行った(表1)。“blogram”が、ブログのページデータを大規模かつ系統的に収集開始したのは2009年春からである。ブロガーの自主的な登録も2009年6月から開始され、その一部では博物館ブロガーの性別・年齢・住所情報を把握可能になった。なお、ページデータ収集の対象とするブログは適宜追加されており、対象を固定した追跡調査ではない。この後の結果の報告と分析では主に第2回データを用いる。

表1 調査概要(第1回、第2回)

記号	項目	第1回	第2回
	マッチング実施日	2010/4/28	2010/11/10
M1	突合せに使った基本名称数(博物館名、関連ワード)※1	7,706	7,805
	内 国内博物館名称	7,706	7,706
	海外博物館名称	—	98
	博物館関連ワード ※3	—	1
M2	突合せに使った全名称数(博物館名、関連ワード)※2	8,469	8,597
	内 国内博物館名称	8,469	8,468
	海外博物館名称	—	128
	博物館関連ワード ※3	—	1
B	突合せに使ったブログ数(第1段階の絞込み) ※4	3,851	23,668
	対象絞込みの条件 ※5	3回以上	1回以上
	カテゴリー設定条件の基本ワードが一定回数以上出現したもの		
R	突合せ結果データ(ブログ記事URL+時間+博物館名称)	37,076	120,702
	対象となるデータの期間(2009年4月以降実施日まで)	33,589 91%	112,723 93%
N1	突合せができた名称数(ノード1)	2,541	3,988
	内 国内博物館名称	2,541	3,901
	海外博物館名称	—	86
	博物館関連ワード ※3	—	1
	博物館1館当り突合せができたブログの最大数	334	1,207
	博物館1館当り突合せができたブログの最小数	1	1
	関連ワードと突合せができたブログ数	—	74
N2	突合せができたブログ数(ノード2) ※6	2,575	13,855
	内、登録によりブロガーの住所情報を把握できたもの	718	2,390
	登録によりブロガーの性別・年代情報を把握できたもの	—	4,464
	2009年3月以前の記事が確認できているもの		8,815
	1ブログ当り突合せができた博物館の最大数	364	692
	1ブログ当り突合せができた博物館の最小数	1	1
E	突合せの数(エッジ)	17,044	63,246
	突合せができたブログに含まれる記事の合計数	—	4,354,915
	内、博物館名称を言及している記事の総数	25,530	88,940

※1 博物館の正式名称、関連ワード

※2 ※1に同義の別名を加えたもの

※3 第2回調査では、博物館名称以外に東京の共通チケットの名称「ぐるっとパス」を追加

※4 「博物館ブログ(A)」と呼ぶ。

※5 「blogram」の7カテゴリーのいずれかに分類されたブログ

※6 「博物館ブログ(S)」と呼ぶ。

#### 4 調査結果：博物館ブロガーのプロフィールと地理的な分析

##### (1) 性別・年代

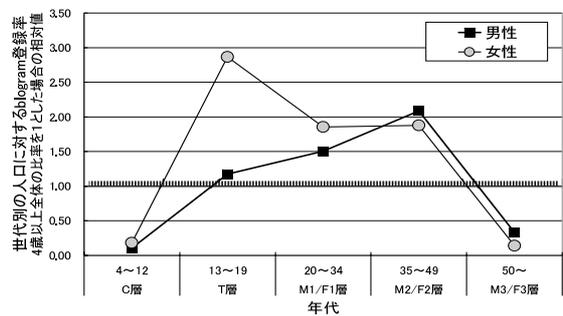
“blogram”に自主的に登録を行ったブロガーのうち4,464件は、登録時に性別・年代情報を収集していた(表2)。

表2 博物館ブロガー 性別・年代分布 (登録データに基づく)

年代呼称	年齢幅※	男性	女性	合計	構成比
C層	4~12	41	43	84	1.9%
T層	13~19	65	107	172	3.9%
M1/F1層	20~34	545	840	1,385	31.0%
M2/F2層	35~49	1,124	957	2,081	46.6%
M3/F3層	50~	512	230	742	16.6%
合計		2,287	2,177	4,464	100.0%
構成比		51.2%	48.8%	100.0%	

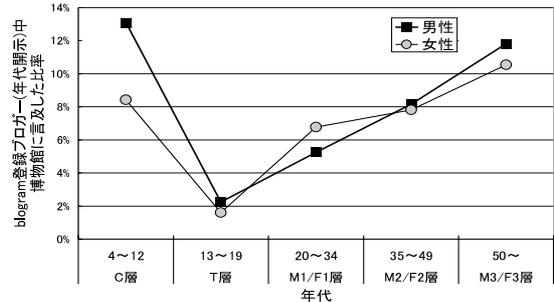
まず、男女の比は、51.2対48.8であり大きな偏りは見られなかった。

年齢については、正確な実年齢ではなくいくつかの階層(C層：4~12歳、T層：13~19歳、M1/F1層：20~34歳、M2/F2層：35~49歳、M3/F3層：50歳以上)を設けた。博物館ブログの絶対数は、人口に対するブログ活動の割合と、ブログ活動している中で博物館関連の記事の執筆の有無の2つの要素に分解して考えることができる。各年代の総人口に対して“blogram”に登録しているブロガーの数の比率を、全年代の合計値を基準にして相対値であらわしたものが図1(a)である。“blogram”への登録比率は、男性ではM2層(35~49歳)、女性ではT層(13~19歳)で高いことがわかる。一方、“blogram”



※2005年国勢調査の結果に基づく。年齢が特定できた4歳以上の人口データとblogram登録者の比を計算し、総合計の比で正規化。

(a) 対人口比割合(相対値)



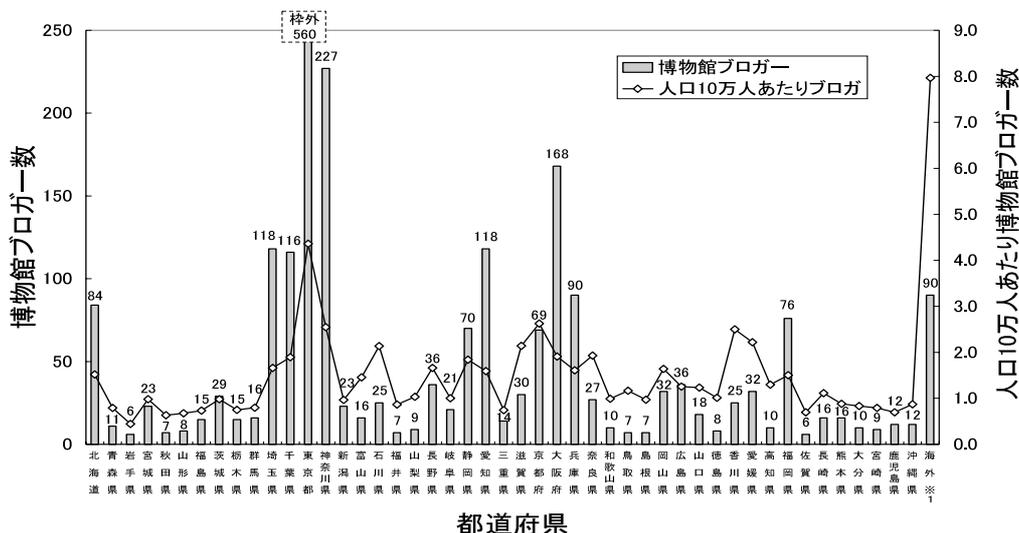
(b) 博物館関連記事執筆割合

図1 blogram登録者中の性別・年代別の集計

に登録されたブロガーのうちの博物館ブロガーの比率は、図1(b)になる。男女とも傾向は同じであり、T層(13~19歳)以降は、年代の高い層で博物館ブロガー比率が高まる。

##### (2) 地理的な分布

“blogram”に自主的に登録を行ったブロガーのうち2,390件は、登録時に住所情報を収集していた(図2)。



都道府県の人口については、「統計でみる都道府県のすがた2010」(総務省)を参照。  
 ※1 「海外に在留邦人数調査統計 平成22年速報版」(平成21年10月1日現在)(外務省)を参照。  
 海外に在住する日本国民の数。3ヶ月以上海外に在留している数。  
 ここでは、日本語のブログは、日本国民によって運営されているものと仮定。

図2 都道府県別の博物館ブロガーの絶対数と対人口比

都道府県別博物館ブロガーは、絶対数では東京の560人が突出している。他に、東京の近接3県（神奈川県・千葉県・埼玉県）・愛知県・大阪府で100人を越えている。また、海外在住者も90人と上位に入っている。さらに、これらの数値を、都道府県別の人口・海外在留邦人数と比較し、人口10万人あたりの博物館ブロガー数の比率を折線で示す。絶対数が多い地域はこの比率においても高いが、一方でどの地域であっても一定の水準の範囲で博物館ブロガーが存在することも明らかになった。

## 5 調査結果：博物館への関心

博物館ブロガーが持つ様々な関心事の中で博物館はどのような位置を占めているのかを確認するために、個々の博物館ブロガーが記述した博物館関係の記事の累積数と、それがそのブログの記事の累積全体数に占める比率を算出した。

全体としてみると、大多数のブロガーは、様々な関心の対象の一部として博物館に言及しているのであり、それだけを専門的に扱っているのは限定的であるということがわかった。一方、博物館への関心が高い一部のブロガーは、数は少ないが影響力は大きい。博物館記事比率30%以上、博物館記事の絶対数6件以上の総計で、ブログの数は128（0.9%）に過ぎないが、記事数の12.1%をしめる。

## 6 調査結果：博物館ブロガーの個別インタビュー

今回収集したデータの意味を確認するため、第1回調査で抽出したブロガーに直接のインタビューを行った。対象は、記事数が多いブログの中でブロガーの住所地が東京と3県（神奈川県・千葉県・埼玉県）とした。ブログを目視で確認したうえで、博物館・展覧会についての専門的なものと、一部のコンテンツとして記述されているもの、それぞれ上位10個を選び、前者から1件、後者から5件の許諾を得、合計で6名に個人のプロフィール、ブログでの活動の経緯と内容、博物館への関心についてインタビューを行った。

インタビューの結果、対象者全員が基本的に博物館・展覧会に関する感想・評価のブログ記事執筆を訪問の事後に行なっていることを確認した。単に関心を抱いて話題に取り上げているのではなかった。

## 7 まとめと展望

今回収集・分析したデータは、市民全体の平均的な挙動を推定するための標本ではない。インターネ

ット上で相対的により積極的に博物館に関する記事を作成している市民セグメントに関するものである。このセグメントに属する市民の数は限られているが、他の市民に対する影響力は大きい。活動者の絶対数の増加と、活動が他の市民に与える影響の効率向上によって、博物館の運営に大きな影響を与えることが可能になると考える。

## 参考文献、ウェブ

- 1) 株式会社きざしカンパニー「ブログランキング & 成分解析」サービス“blogram”，<http://blogram.jp/>
- 2) 丹青グループ「インターネットミュージアム」，<http://www.museum.or.jp/>
- 3) 本間浩一「博物館に関心を持つ市民に関する調査手法の提案 —ブログの解析—」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第15号，2011，pp.15-24.

# 科学館におけるリピーターの分析に関する調査研究

公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館

中村 隆・高原 章仁  
田代 英俊

## 1. 調査研究の背景

筆者らは、科学館の効果を測る手法を検討するために、科学技術館での来館者へのアンケート調査の結果から、属性（性別、年齢層）、素養（科学技術や理科の選好度、親の影響）、効果（科学技術への興味の喚起度、知識の獲得度、満足度等）を変数としてクロス集計や重回帰分析などにより、これらの変数の相関を分析してきた。その結果、興味の喚起度、知識の獲得度、満足度に高い相関があることが示された。そこで、本調査研究ではもう一步踏み込んで、これらの変数がリピーターの獲得につながる可能性があるかを分析した。

## 2. 調査研究方法

まず科学技術館への個人来館者を対象にアンケート調査を行った（調査期間：2010年8月16日～22日、回答者数：子ども598名 大人601名）。集計結果から、来館回数（「初来館者かリピーターか」）、再来館への意識喚起度（「また来たいと思ったか」）の2つの変数を軸に、属性（性別）、素養（「理科の授業が好き」、「理科の成績は良い方だと思う」、「親が科学館に連れていく」）と効果（「科学技術の知識が得られた」）の各変数とクロス集計によって相関を調べた。

## 3. 分析結果

### 3-1. 属性（性別）との関係性

まず、属性（性別）との関係性についてみる。図

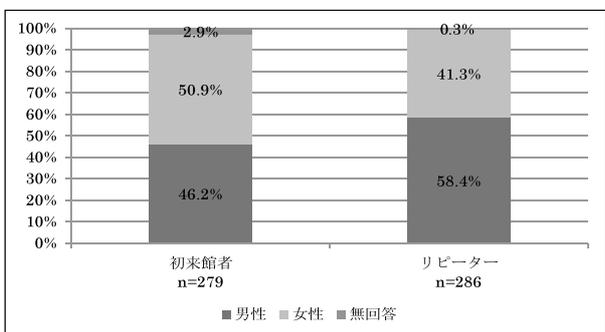


図1 来館回数と性別の関係

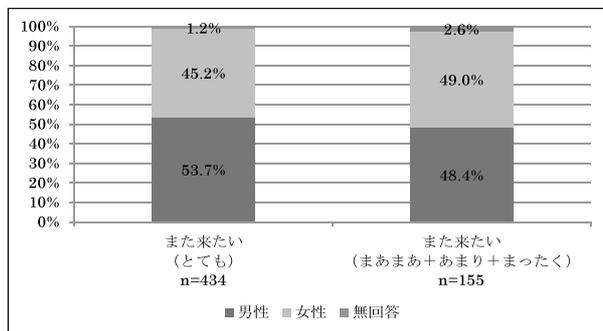


図2 再来館意識と性別の関係

1に来館回数と性別との関係、図2に再来館意識と性別の関係を示す。図1よりリピーターの方が男性の割合が多くなっているのがわかる。また、図2より再来館意識が高い（また来たいと「とても」思った）方が、男性の割合が少し多くなっている。よって、男性の方がリピーターになりうる傾向があるように思われる。

### 3-2. 素養との関係性

次に、素養（理科の選好度、親の影響）との関係性についてみる。

図3に来館回数と理科の選好度、図4に再来館意識と理科の選好度との関係を示す。図3より、初来館者は、理科の授業が「とても」好きという割合が43.0%であるのに対し、リピーターでは50.0%とリピーターの方が理科の選好度が高くなっている。ま

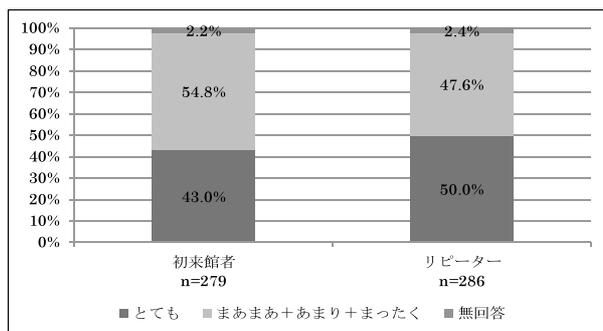


図3 来館回数と理科の選好度との関係

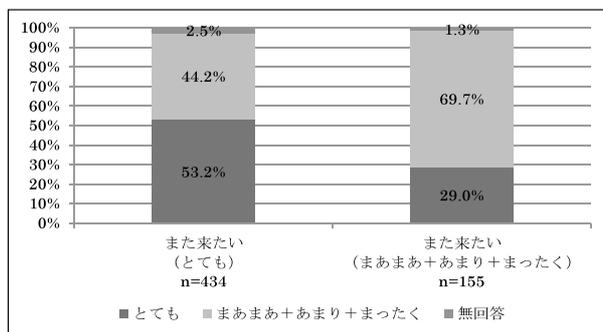


図4 再来館意識と理科の選好度との関係

た、図4を見ると、再来館意識が高い方が理科の授業が「とても」好きと回答している割合が53.2%で、あまり高くない方では29.0%と低く大きく差が出ている。

図5に来館回数と親の影響、図6に再来館意識と親の影響の関係性を示す。図5より親が科学館に「連れて行ってくれる」と回答しているのは、初来館者で75.6%、リピーターでは82.6%ととても高くなっており、来館者の多くは親が科学館に連れて行ってくれていることが分かるが、リピーターの方がやや高くなっている。また、図6よりも再来館意識が高い方が連れて行ってくれると回答している割合が多くなっており、親の影響がリピーターになる要因となりうるということがうかがえる。

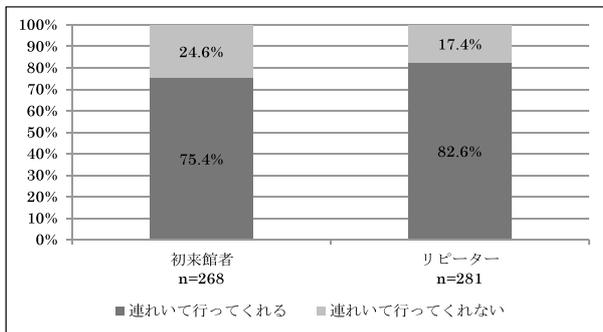


図5 来館回数と親の影響との関係

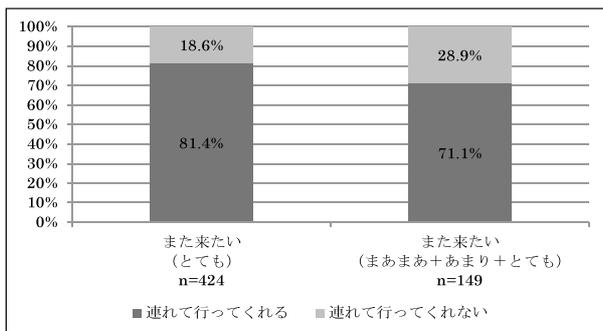


図6 再来館意識と親の影響との関係

### 3-3. 効果との関係性

続いて、展示の効果（知識の獲得度）との関係性についてみる。図7に来館回数と知識の獲得度、図8に再来館意識と知識の獲得度の関係性を示す。図7より、展示を体験して科学や技術について「とても」知識が得られたと回答しているのは、初来館者で56.3%、リピーターで59.1%とリピーターの方がやや知識の獲得度が高くなっている。また、図8では、再来館意識が高い方は「とても」と回答しているのが69.4%であるのに対して、そうでない方は29.0%となっており大きな差が出ている。よって、

展示の効果はリピーターになる要因として大きく関係性があると思われる。

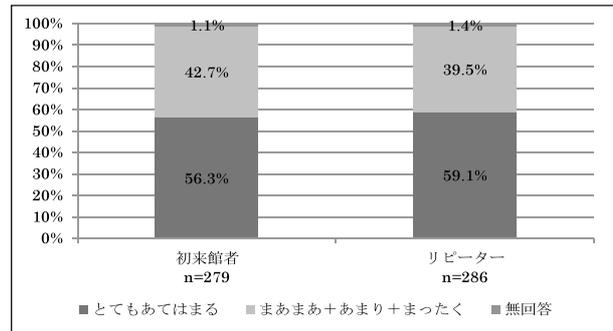


図7 来館回数と知識の獲得度との関係

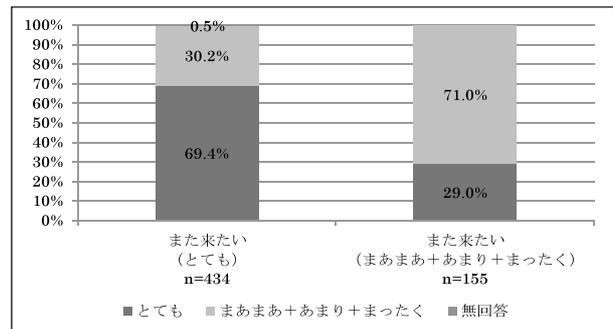


図8 再来館意識と知識の獲得度との関係

### 3-4. 来館回数と再来館意識

最後に来館回数と再来館意識の関係性をみる。図9より初来館者もリピーターも70%以上がまた来たいと「とても」思ったと回答しているが、リピーターの方が、少し再来館意識が高くなっているのがわかる。

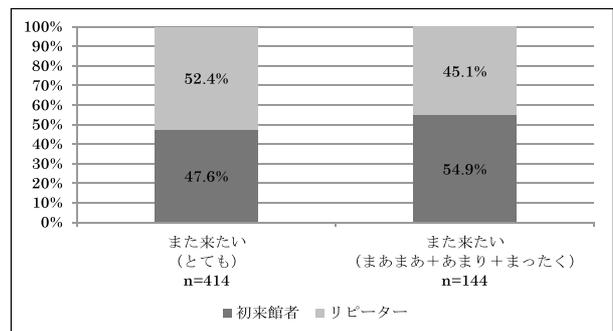


図9 来館回数と再来意識との関係

## 4. 考察

以上の結果より、図からは来館回数、再来館意識とも属性（性別）、素養（理科の選好度、親の影響）、効果（知識の獲得度）と関係性があるように見とれる。しかし、グラフを概観するだけでは正しく判断はできない。そこで、それぞれの変数について $\chi^2$

乗検定を行った。結果を表1に示す。

表1より来館回数については、性別、親の影響以外は有意な差がないという結果になっている。つまり理科の授業が「とても」好きであること、展示を体験して知識が「とても」得られたことと来館回数は関係性がないといえる。

一方、再来館意識については、性別以外は何れも有意な差があるとなっており、素養にも効果にも関係があることが示された。つまり男女にかかわらず、理科が「とても」好き、親が博物館に「連れて行ってくれる」、展示を体験して科学や技術の知識を「とても」得られている方が、リピーターになりうる可能性が高いことが示された。

表1 各関係性についての検定結果

	属性	素養		効果
	性別	理科の選好度	親の影響	知識の獲得度
来館回数	◎	×	○	×
再来館意識	×	◎	◎	◎

◎：1%水準で有意 ○：5%水準で有意 ×：有意でない

ちなみに、来館回数と再来館意識について検定をすると有意差がないという結果になる。すなわち、来館回数と再来館意識には関係性が見られず、実際には再来館意識が高まっても再来館につながっていない可能性がうかがえる。しかし、親が科学館に「連れて行ってくれる」こととは、どちらも関係性があるという結果が示されている。よって、親が子どもを科学館へ連れていきたいと思うように促すことで、子どもがリピーターとなりうる可能性がより高まることが推察される。今後は因果関係も含めてより深い調査研究が求められる。

## 「ミュージアム県・ながさき構想」の策定に携わって

文化環境研究所

高橋 信裕・田中 撰  
山城 弥生・佐竹和歌子

長崎県では、県下のミュージアムを文化振興・まちづくりの拠点として活かし、県政の重点テーマである「文化観光立県」実現の一環として寄与する「ミュージアム県・ながさき構想」（仮称）の策定に取り組んだ。構想策定にあたり、県内の全166館のミュージアムを対象としたアンケート票の送付・回収に加え、現地調査を行い、設置目的や立地環境、建物、展示の規模、予算措置、人員体制などについて精査した。また、一方では、市民に対するミュージアム認知度調査を実施し、地域におけるミュージアムの貢献度や認識度についての測定も行なった。

調査に基づき、明らかになった課題を踏まえて、地域社会におけるミュージアムのあり方と、長崎県のまちづくりや観光の観点から提言されたミュージアム連携の構想について報告する。

### 1. 現状を客観的・現実的に捉える調査

#### 1-1 ミュージアムの厳しい現状が明らかに

市町村合併の進展により、旧来の博物館、資料館などが統廃合され、それにともない職員の兼任、非常勤化等が促進し、収集資料の公開・展示や社会教育施設としての役割が果たされず、保存設備も整備されていないなど、倉庫状態に陥っているミュージアムが見られた。

専門職である学芸員はもとより、館を運営する常勤スタッフの体制に不備が目立ち、全体の7割以上に十分な人員体制が敷かれていないとともに、小規模の施設では、学芸員や専門職のいない施設も多い。学芸員同士のつながりやミュージアム間のネットワークが十分でないため、細やかで身近な日常的問題を相談する相手がいない、コレクションの扱いなどにおいて学芸員の基礎的なスキルアップが出来ないことなどが課題として挙げられた。

#### 1-2 地域ごとのミュージアムの強み

長崎県の観光施策とそれぞれの地域のポテンシャルとの関連を精査し、地域性を色濃く反映させるミュージアムの存在と可能性について分析を行った。

**(1) 長崎市・西彼（長崎市、西彼杵郡）の強み**

県内のミュージアムの中核的な役割を持つ歴史博物館と美術館の存在、歴史的建造物の博物館化・観光資源化、平和発信のミュージアムなど、長崎の顔としての風格を備えている。

**(2) 佐世保市・東彼・北松（佐世保市、東彼杵郡）の強み**

九十九島の海の魅力を発信する水族館、地元の歴史や風土を伝える民俗郷土資料館、地場産業と伝統工芸である陶芸の観光資源化に取り組む陶芸館など、自然環境と伝統技術が紡いできた文化を伝える。

**(3) 西海（西海市）の強み**

地域の農業と事業連携するバイオパークへの新たな取り組み、地域に根ざす火力発電ミュージアム、アナログレコードのコレクションのミュージアムなど時空を超えた異体験が特色。

**(4) 平戸・松浦（平戸市、松浦市）の強み**

里山の自然の中での昆虫との出会い、水中考古学の調査・研究を行なうミュージアム、松浦藩主の資料館など、日本の原風景に遊ぶ体感がある。

**(5) 雲仙・島原（島原市、雲仙市、南島原市）の強み**

火山のフィールドミュージアム、古文書の修復の専門家を抱える島原藩主の資料館、歴史的景観・建造物を活用するミュージアム、彫刻家の生家を復元した美術館など、自然と人との共生の歴史を伝える。

**(6) 諫早・大村（諫早市、大村市）の強み**

干拓の自然や歴史を紹介するミュージアム、旧大村藩主関連の資料を豊富に収集保存する資料館、星空の眺望や花卉などの地の利を活かしたミュージアムが特色。

**(7) 対馬（対馬市）の強み**

国指定天然記念物ツシマヤマネコの学習施設、旧対馬藩主と朝鮮との交流を伝える古文献資料を豊富に収蔵する資料館など、国際交流の先進事例が地域の特色。

**(8) 壱岐（壱岐市）の強み**

イルカとふれあう施設や、弥生遺跡と島内のミュージアムを結ぶ「しまごと博物館」など、まちの活性化とミュージアムの連携がモデル事例となっている。

**(9) 五島（五島市、新上五島町）の強み**

キリシタン関連の豊富な文化財、教会の資料館化など、テーマを絞り込んだ地域のセールスポイントがブランドとして評価されている。

**1-3 地域における博物館の連携事例**

市民参加による運営、企画の事例や、ミュージアム

が地場産業や地域文化の再生拠点となっているなど、まちづくりや観光資源化への取り組みが、行政・民間・市民らの協働により進められている例を紹介する。

**(1) 町立資料館と市民参加**

地域コミュニティが共有する資料館である。住民自ら、運営や企画に参画し、活動を推進している。地域のお茶の歴史や、港としての交易の歴史、歴史の舞台となった史跡など、地域の歴史景観も含めて取り込めば可能性が広がるのではないかと。

**(2) 市立水族館と産業・学術との連携**

市立水族館では、「水産農業水族館三施設連絡協議会」のもとに、市の水産センターや漁協、農協、大学が連携し、体験ツアーなどのイベントや研究発表会を行っている。企画展の際に歴史と関連付け、博物館に資料の貸し出しなどの協力を得ている。ペンギンをテーマとする特色のある施設であり、地域における異業種との連携や博物館・水族館・大学の共同企画展示といった視点から、連携のモデルケースになりうるのではないかと。

**(3) 町立陶芸館と産業・観光振興・伝統工芸の連携**

町の地場産業である焼物をPRする拠点施設となっている。農業集落と窯業集落が隣り合わせにある町で、観光・商工・企画・文化財の部署が一体となって、観光資源を活用していく取り組みが見られる。

**(4) 市立博物館と県立埋蔵文化財センターによる「しまごと博物館」**

調査研究機関である県立埋蔵文化財センターと展示・交流拠点施設である市立博物館が一体となった複合施設である。壱岐の島に残る史跡や名所と博物館の展示を結ぶ「しまごと博物館」の拠点となっている。

**(5) 学芸員同士の連携**

市内の博物館・資料館の職員らにより博物館協会を組織している。学芸員同士の個人的なつながりもある。博物館職員のリーダーシップが地域振興に有効に働き、まちづくりの中核施設として機能している。文化施設の指定管理者団体である財団が合併され、更にスムーズな交流が期待されている。

**1-4 地域におけるミュージアムの認知度と貢献度**

住民への座談会形式のヒアリング調査からは、「ミュージアムは敷居が高いように感じる」、「地元の観光団体等との連携があまりとられていない」、「観光資源としての魅力化への取り組みが行なわれてはいるものの、地元を巻き込むことができていない」など

の声を聞くことができた。また、ミュージアムの魅力は、「スタッフの顔の見える親切な対応・解説にある」との意見が多かった。ミュージアムに求めることとしては、「学校教育との連携により郷土愛を育む場となる」、「市民参画を受入れてほしい」などがあがった。次に4市で行った調査の概要を報告する。

#### (1) 長崎市の調査概要

長崎市の特徴は、①県内でミュージアム数が最も多い、②県内のミュージアムの核となる「長崎歴史文化博物館」と「長崎県美術館」が設置されている、③県都であり和華蘭文化の交差する観光都市である。住民の意見：

- ・ミュージアムに行く理由については、「コンセプトの良さやテーマがはっきりしている」、「研究に力を入れておりその成果を発信している」、「展示等の解説をするガイドの魅力がリピートにつながる」、「子ども向けの設備が充実している」など。
- ・行かない理由については、「顧客を喜ばせる努力をしていない」、「コンセプトが見えない」、「展示替えをしていない」など。
- ・ミュージアムに求めることは、「学校教育との連携を強化し地元の人に愛着を持ってもらう」、「観光客に地元の魅力を紹介できる」、「市民とのつながりを持つ」など。

#### (2) 佐世保市の調査概要

佐世保市の特徴は、①長崎市に次いでミュージアム数が多くミュージアムの交流人口も多い、②県北の中心都市でありハウステンボスをはじめとする観光資源が豊富である、③明治以降に多くの人々が移り住んだ新興工業都市であるため、新しい文化が芽生えやすい風土にある。

住民の意見：

- ・ミュージアムに行く理由については、「スタッフの対応が親切で解説が分かりやすい」など。
- ・行かない理由については、「入館料が高い」、「周辺環境を含めた魅力づくりを行っていない」、「情報がないため存在を知らなかった」など。
- ・ミュージアムに求めることは、「誰かと共感しながら鑑賞できる場である」、「地元の作家の魅力を紹介するなど地元民が楽しめる」、「子ども向けプログラムの充実」など。

#### (3) 壱岐市の調査概要

壱岐市の特徴は、①県立の埋蔵文化財センターと連携する「壱岐市立一支国博物館」を核とした「し

まごと博物館構想」を展開する、②地理的・歴史的背景から、県内でも独自の文化を形成してきた、③国の特別史跡に指定された「原の辻遺跡」ほか、数多くの遺跡を有する歴史観光地である。

住民の意見：

- ・ミュージアムに行く理由については、「地域の誇りとなる偉人が紹介されている」、「スタッフの熱意を感じられる」など。
- ・行かない理由については、「そもそも関心がない」、「田舎なのでメジャーな企画があれば行く」など。
- ・ミュージアムに求めることは、「壱岐の文化を全国に発信する」、「観光コースに組み込む」、「遺跡ボランティアとの連携」、「ハードルを上げすぎずに地元愛を発信できる」など。

#### (4) 平戸市の調査概要

平戸市の特徴は、①学芸員同士の連携が既に行われている、②まちづくりや観光などの市民団体による活動が盛んである、③松浦家城下町時代の歴史を持ち、古くからの街並みが残る観光地である。

住民の意見：

- ・ミュージアムに行く理由については、「地域資源の魅力を語る収蔵物がある」、「学術的な機能を発揮し地域学の拠点となっている」など。
- ・行かない理由については、「入館料が高い」、「観光旅行のパッケージに組み込まれていない」、「他の観光施設が魅力的である」、「会場にスタッフがいない」など。
- ・ミュージアムに求めることは、「学校教育と連携し地元を知ってもらう場になる」、「入館料サービスの提供」、「運営について市民や観光関係者との協働体制を組む」、「経済効果のみではなく地域にとって大事な博物館を評価する」など。

## 2. 今後の方向性と仕組みづくりの提案

### 2-1 「ミュージアム県・ながさき構想」のコンセプト

調査結果を踏まえ、「ミュージアム県・ながさき構想」のコンセプトを“「長崎らしさ」を顕在化し、文化資源を生かしたまちづくりを先導するミュージアム・コミュニティの創造”とした。ミュージアムが、地域づくりのコンシェルジュとなり、住民とともに地域の魅力を掘り起こし、顕在化していくことで、地域づくりを先導し、長崎全体の文化的な魅力を高めていけるのではないだろうか。

2-2 長崎県域のミュージアムネットワークと地域のミュージアム・コミュニティの連携

今後の方向性としては、設置主体（公立、私立など）や行政での所管（教育委員会、観光商工部門、文化振興部門、介護福祉部門、子育て部門等）、民間組織（商工会、商店街連合会、文化サークル、慈善団体、NPOなど）や館種等（博物館、美術館、ギャラリー、児童館、観光情報センター、工房、工場、農園、道の駅、図書館、物産館等）を結ぶ、柔らかな連携体制をつくり、地域の文化や資源を継承、発展させていく、新たな地域自治おこしの仕組みづくりが、地域それぞれの実情の下に形成され、それらが連携していくべき時期に来ている。

具体的には、県全体を視野に入れたミュージアムネットワークと、地域ごとのミュージアム・コミュニティを設置する二段階の連携の構想を描いた。

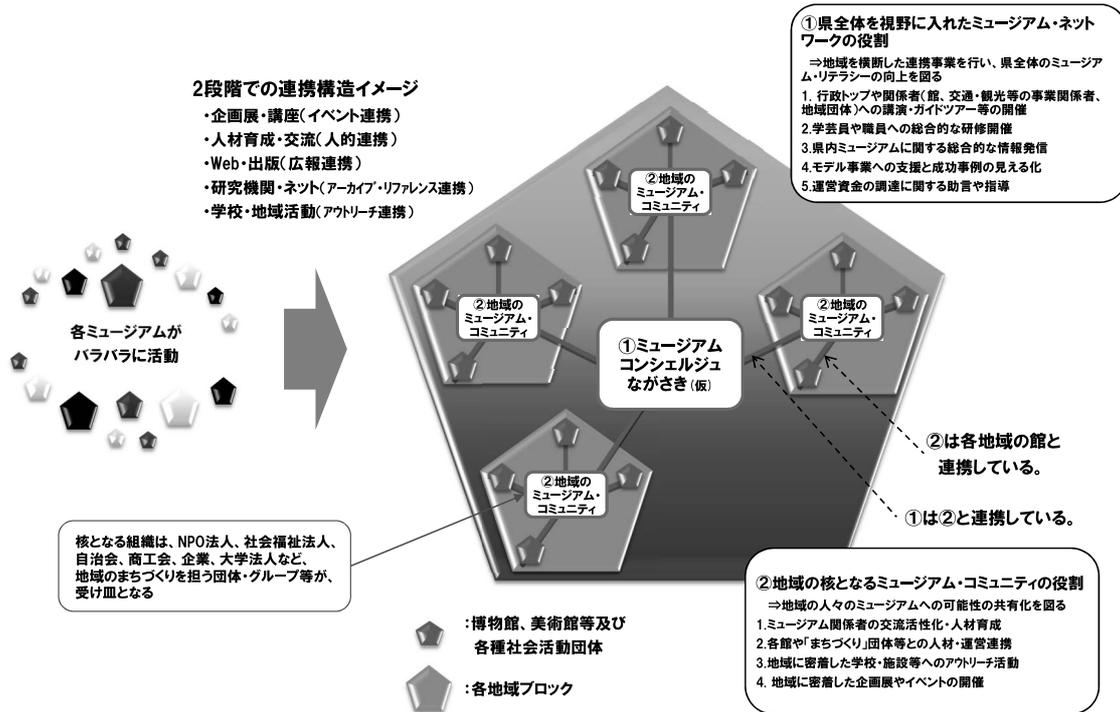
県全体を視野に入れたミュージアムネットワークは、地域社会におけるステークホルダー（福祉や教育、観光の民間団体等や地域住民）のミュージアムリテラシーの向上を図る。また、専門性をもつ人材の育成、学芸員や専門職のリスト作成、地域の連携

モデル事業への支援や、地域連携やまちづくり・観光などでの成功事例の見える化、運営資金の調達に関する助言や指導を行なう等である。地域を越えたミュージアム連携や人材交流、ミュージアムコレクションの共有化を図るデータベースの一括管理、県内ミュージアムのホームページ開設による展覧会やイベント等の情報発信などを行ないミュージアムの活動を支援する。

一方、ミュージアムを核とするミュージアム・コミュニティには、歴史・美術・科学等の愛好家、観光やまちづくり、福祉、教育等の市民団体と地域住民が参画し、地域社会の課題に密接に関わるミュージアムの企画、運営を行うとともに、館種や設置、所管を越えて共同で展覧会やイベントを開催するなど、地域内交流の活性化を図る。

大きな視点から言えば、地方分権、地域主権に応える新たな地方文化の受け皿づくりである。そこには、一元的、画一的な規制や体制志向ではない、それぞれの事情や特性、目的等を許容し、包含する緩やかで柔軟な絆づくりが求められている。

県博協、歴史・県美、民間企業、市民団体との連携などの検討を踏まえながら、地方分権、地域主権に応える新たな地方文化の受け皿づくりと緩やかで柔軟な絆づくりが求められている



## 歴史的建築物の博物館化における研究

— シンガポールの事例について —

### A study on Musealization of historic building

— Case Study of Singapore —

常磐大学大学院人間科学研究科博士後期課程

チョウ チュン ニ  
邱 君妮

#### 1. 研究背景と目的

18世紀末から19世紀初頭に近代の博物館が誕生して以来、建築物<sup>1)</sup>を改造して博物館として使用することが行われている。一方、20世紀後半以降、グローバル化の影響下、各国の都市開発が急速に進むことによって、歴史的建築物が消失しつつある。

このため、専門家たちからは様々な保存計画が提案され、歴史的建築物の再利用が盛んに行われている。その計画の中の一つとして、博物館の形式で運営される博物館化 (musealization) の傾向が見られる。シンガポールでは、現有の博物館施設52ヵ所のうち、歴史的建築物から用途転用されたのは17ヵ所で、全体の約32%を占めている<sup>2)</sup>。

しかしながら、国によって歴史的建築物の博物館化の背景、方法、現状は異なる。それは歴史と文化が異なるからであり、それぞれの国や地域の歴史と文化の影響を受けて生み出された歴史的建築物の博物館化の傾向の違いを分析するとともに、各国の文化政策と博物館法令における博物館の位置付けに根拠を明らかにする必要がある。

一方、「博物館化」という言葉は、博物館学に関する研究で動産の博物館資料を対象に使われることが多いが、その定義付けは千差万別である。とくに、歴史的建築物を博物館へ用途転用した場合、動産としての収蔵資料の展示だけでなく、不動産としての建築物をひとつの展示物としているのが特徴である。

これまでに建築学の視点から歴史的建築物の用途転用に焦点を当てた事例は数多く報告されているが、博物館学視点から博物館化を論じた研究や知見は少ない。博物館資料 (museum object) を解釈する「博物館化」の理論は、歴史的建築物を博物館などの展示施設へ用途転用する場合に、適用できるのだろうか。博物館建築理論の分類から、歴史的建築物の博物館化に関する詳しい定義付けと分類ができるのだろうか。

本稿では上記問題を解明するため、シンガポールの歴史的建築物の博物館化の例として、1) 現地における単体の歴史的建築物の博物館化の事例：オールドフォードファクトリー記念館 (Memories at Old Ford Factory)、2) 現地における複数の歴史的建築物の博物館化の事例：ペラナカン博物館 (The Peranakan Museum)、アジア文明博物館 (Asian Civilisations Museum) 及びシンガポール郵便博物館 (Singapore Philatelic Museum) を取り上げる。

#### 2. 先行研究

##### 2.1 博物館化 (Musealization)

「博物館化 (musealisation)」とは何か。これまでこの用語に関しては十分に検討されてきていない。

まずは欧米における定義付けについて、説明する。2010年11月に発行されたICOM国際博物館学委員会の『博物館学の基礎概念 (Key of Concepts of Museology)』という文献では、博物館学者 Zbynek Stransky の思想を紹介して、「厳密に博物館学的な観点で言えば、博物館化は、自然または文化的環境から何かを物理的または概念的に抽出し、それに博物館のステータスを与え、すなわち博物館の資料に変換すること」<sup>3)</sup>、また、「科学的プロセスとしての博物館化は、次の基本作業を行うことを必須とする：保存 (選択、取得、コレクション管理、保存修復)、研究 (目録の作成を含む)、コミュニケーション (展示会や出版物など)。別の見方をすれば、博物館の資料 (musealia) となるには、選択、コレクション管理、展示に関するすべての博物館活動が必要である。」<sup>4)</sup> という記述がある。

一方、Peter Van Menschは、資料が一次的な脈絡 (primary context) から博物館学的な脈絡 (museological context) に移動するプロセスが博物館化 (musealization) である<sup>5)</sup> と解釈した。

これらから、欧米の博物館化は、モノを中心に発展することがわかる。また、博物館化は元々博物館と関係ないモノが博物館のモノ (museum object) になる過程である。

日本では、学術的立場から博物館化について論じた研究は少ない。堀江典子、平松玲治 (2010) 「公園の博物館化に関する一考察」という論文では、公園の博物館化と博物館の公園化が三つの方向で整理されている。

第一の方向は「博物館の公園化」である。博物館における公園的な屋外空間や屋外レクリエーション機能の付加あるいは重視であり、いわゆる野外博物

館、民家園、生態園など野外展示空間を中心とする博物館や、博物館に付随した遊び場、散策路、広場等をあげている。

第二の方向は「公園の博物館化」である。公園における博物館的施設や機能の付加あるいは重視であり、公園における展示解説等を目的とした施設やルートの設置、解説のためのプログラムの実施などをあげている。

第三の方向は「博物館の公園化」でも「公園の博物館化」でもない、エコミュージアム、フィールドミュージアム、まると博物館などである。この第三の分類では、従来の博物館の枠には納まらず、博物館と公園の双方に関連するが、両方でもないものである。

堀江典子、平松玲治（2010）の論文では、同じ日本語の「博物館化」と表記されているが、英訳では「Museum-like Functions of Parks」となっている。すなわち、この論文では博物館と公園の機能が重なる視点から分析しており、欧米の「博物館化（Musealisation）」とは異なることがわかる。

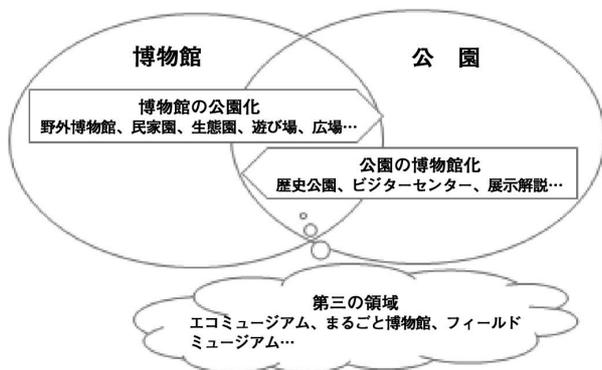


図1 堀江典子、平松玲治（2010）による博物館領域と公園領域の重複<sup>6)</sup>

台湾でも博物館化に関する研究は少ないが、先行研究として挙げられるのは郭功義（1990）「病院の博物館化」である。郭功義（1990）の研究によると、博物館化はモノ（object）、観念（concept）、空間（space）、コミュニケーション（communication）、行動（behavior）の五つに分類されている。

郭功義（1990）の論文では、中国語で日本語と同じ「博物館化」と表記されているが、英訳では「A Study on Museumification of Hospitals」となっている。すなわち、この論文では空間という主旨が明らかにされている。

上記の先行研究により、「博物館化」の定義は、歴史的建築物の場合、柔軟に解釈する必要がある。

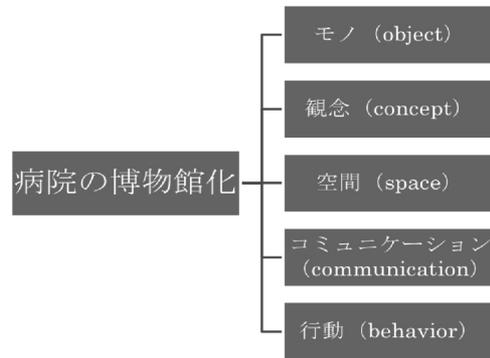


図2 郭功義（1990）の博物館化分類図（筆者整理）

たとえば、野外博物館である博物館明治村の場合には、空間の博物館化の構成要素が空間建物の内部だけではなく、周辺の景観に至るまで及んでいるため、本研究における「歴史的建築物の博物館化」の定義は、本研究を進めている段階では、次のように定義できる。

従来博物館とは無縁であった建築物が、博物館として転用されるプロセスのことであり、そこでは、博物館の方法論を駆使して、あらゆる資料と空間を博物館の機能として取り扱う。

しかし、現在、博物館はその種類によって様々な運営方法が存在する。同時に、博物館化もそれぞれの異なる形式で発展し続けている。そのため、歴史的建築物の博物館化に関する詳しい定義と分類は今後の課題としたい。

## 2.2 博物館建築（Museum Architecture）

Ivo Marovicは、その著書『博物館学序論—ヨーロッパのアプローチ（Introduction to Museology—The European Approach）』から博物館建築と建築博物館の関連性について、建築的側面から博物館を次の5つに分類した。

- 1) 博物館のために特別に建設した博物館。
- 2) 歴史的建築物を博物館の用途に転化し適用させた博物館。
- 3) 歴史的価値のある建築物そのものを博物館化した博物館。
- 4) 野外博物館。
- 5) 自然界に存在する博物館（類似施設）。

しかし、この分類は検証する必要がある。特に上記2)と3)はさらに分類可能なのではないか。

一方、Michaela Giebelhausen（2006）は「博物館建築（Museum Architecture）」という文書で「現在、博物館建築は2つの考え方で揺れている。すなわち、記念碑（monument）としての博物館と箱モ

ノ (instrument) としての博物館である」また、「博物館の建築はその内容 (contents) と入れもの (container) 間の複雑な関係で定義される<sup>7)</sup>」と述べている。

しかし、Michaelaの文書の対象は博物館のために建設した建築である。本研究の対象である、元々は博物館建築ではない、歴史的建築物の博物館化の場合、同じその内容 (contents) と入れもの (container) 間も複雑な関係で定義されるのだろうか。この考え方でIvo Maroevicの博物館建築の分類は、更に分類できるのではないか。以上の問題意識を持った。

### 3. 研究方法

2.2で述べたIvo Maroevicの5つの分類のうち、2) 歴史的建築物を博物館の用途に転化し適用させた博物館と3) 歴史的価値のある建築物そのものを博物館化した博物館を検証するため、本稿では、歴史的建築物の博物館化の現状によって、次の4つの分類を仮定する：

- 1) 現地における単体の歴史的建築物の博物館化。
- 2) 現地における複数の歴史的建築物の博物館化。
- 3) 移築された単体の歴史的建築物の博物館化。
- 4) 移築された複数の歴史的建築物の博物館化。

2011年5月、シンガポールの歴史的建築物の現況を考察した結果、シンガポールには3)と4)の分類がない。この関係で、本稿では上記3)と4)の分類は研究の対象外とする。

本稿では、1) 現地における単体の歴史的建築物の博物館化が行われた例として、オールドフォードファクトリー記念館を取り上げる。また、2) 現地における複数の歴史的建築物の博物館化については、ペラナカン博物館、アジア文明博物館及びシンガポール郵便博物館を取り上げる。

Michaela Giebelhausenの「博物館の建築はその内容 (contents) と入れもの (container) 間の複雑な関係」との定義を検証するため、2.2で述べたICOM (2010) の定義に基づき分析する。つまり、歴史的建築物の内部の博物館機能によって分析する。

### 4. 事例考察

本稿は歴史的建築物の内部の博物館機能：1) 収集と保管、2) 展示と研究、3) 教育普及活動によって、博物館化の程度を分析する（紙面の関係でここで表と写真で現状を示す）。

#### 4.1 単体の歴史的建築物を現地で博物館化

##### —オールドフォードファクトリー記念館 (Memories at Old Ford Factory)

オールドフォードファクトリー記念館は1941年に建てられた車の工場から転用された博物館である。シンガポールにある他の博物館と異なり、当館はシンガポール・ナショナル・アーカイブズ所管である。建築物の中身の博物館化については、表1のとおりである。

表1 オールドフォードファクトリー記念館の博物館化の分析表

建物の中身の博物館化			
項目	収集と保管	展示と研究	教育普及活動
内容	第2次世界大戦を背景として、シンガポールに関する新聞、映像、写真など。	館内では、シンガポール・ナショナル・アーカイブズによって40年にわたって行われた学術調査と証言収集活動の成果に基づいた展示を中心に行っていることから、通常の歴史博物館のようなレプリカやジオラマの展示は少なく、様々な口述記録や写真、地図など各種一次資料から構成されている。	見学ルートの設計にも時間の長さによって2つに分けている。また、学校の歴史教育プログラムと連携する。



図3 オールドフォードファクトリー記念館

#### 4.2 複数の歴史的建築物を現地で博物館化

##### —ペラナカン博物館 (The Peranakan Museum)、アジア文明博物館 (Asian Civilisations Museum) 及びシンガポール郵便博物館 (Singapore Philatelic Museum)

ペラナカン博物館とシンガポール郵便博物館は1912年に建てられた学校から転用された博物館である。アジア文明博物館は1860年に建てられた官庁建築か

ら転用された博物館である。

この三つの博物館はシンガポール遺産局所管である。建築物の中身の博物館化について、表2のとおりである。

表2 ペラナカン博物館、アジア文明博物館及びシンガポール郵便博物館の博物館化の分析表

	建物内部の博物館化		
	収集と保管	展示と研究	教育普及活動
ペラナカン博物館	中国系移民を中心に、ポルトガル、オランダやイギリスなど移民の文化を含む収蔵品。	中国系、ポルトガル、オランダやイギリスなど移民の文化を展示する。	学校教育と連携する。
アジア文明博物館	アジア文明に関する収蔵品14000点。	アジアにおけるシンガポール過去の文化を文明に関する展示である。	
シンガポール郵便博物館	切手は1830年からシンガポールの切手と万国郵便連合の会員国の切手を含む。	切手を活用して、歴史を学習する展示である。	



図4 ペラナカン博物館



図5 アジア文明博物館



図6 シンガポール郵便博物館

## 5. まとめと今後の課題

シンガポールの事例は、動産としての収蔵資料の展示だけでなく、不動産としての建築物をひとつの展示物とすることによって、歴史的建築物の内部の博物館化が完備すると言える。

しかし、これらの歴史的建築物を博物館へ用途転用した場合、歴史的建築物の保存意義と歴史価値については、博物館化することによって、プラスの効果を及ぼすかどうかかわからない。

現段階において本研究については以下の3点にまとめることができる：

- 1) 今回はシンガポールの事例の関係で、移築された複数の歴史的建築物の博物館化と移築された単体の歴史的建築物の博物館化は研究の対象外である。したがって、Ivo Maroevicの理論に基づいて、歴史的建築物の博物館化の分類はまだ検証できない。
- 2) シンガポールにおいて、移築された歴史的建築物がない原因については、現在調査中である。しかし、複数の歴史的建築物を現地で博物館化する類型はシンガポール政府<sup>8)</sup>の支持により発展できたことがわかった。そこで、博物館化の事例の類型は、国の土地の大きさと国の文化政策とも関係がある。この点に基づいて、シンガポールと台湾、日本との歴史的建築物の博物館化の比較研究の基準点については、今後の課題としたい。
- 3) 事例研究の結果、Michaela Giebelhausenの研究のように、歴史的建築物の博物館化はその内容 (contents) と入れもの (container) 間の複雑な関係で定義することが可能と思われる。一体、博物館化という手法は歴史的建築物にとって、本当にいい保存、活用の方法

だろうか？多くの事例から分析する必要がある。この点も今後の課題にしたい。

#### 参考文献

- Andre Desvallees, Francois Mairesse. 2010. *Key Concepts of Museology*. France: ICOM Publications. P51-52.
  - Ivo Maroevic. 1998. *Introduction to Museology-The European Approach*. München: Verlag. P134.
  - Michaela Giebelhausen. 2006. *Museum Architecture: A Brief History*. A Companion to Museum Studies. Sharon Macdonald (e.d.). U.K.: Blackwell.
  - Peter Van Mensch 2003、ヨーロッパにおける博物館研究の動向と今後のミュージアム・マネージメントの方向性、日本ミュージアム・マネージメント学会：ミュージアム・マネージメント/フォーラム2003、P24
  - Peter Vergo ed (1989). *New Museology*. UK: Reaktion Books. Ltd. P28-29.
  - Zbynek Z. Stransky (1995). *Introduction to the study of museology*. ISSOM Publications
  - Zbynek Z. Stransky (1997). *Museology for Tomorrow's World*. ISSOM Publications. P59-64.
  - 郭功義 (1990). 病院博物館化における研究. 台湾台南. P33.
  - 土肥博至、2009、*建築デザイン用語辞典*、東京：株式会社 井上書院、P126。
  - 堀江典子、平松玲治、2010、*公園の博物館化に関する一考察*、博物館雑誌36 (1)、61-74.
  - The National Archives of Shingapore : <http://www.nhb.gov.sg/nas/>
  - The National Heritage Board : <http://www.nhb.gov.sg/WWW/>
  - Urban Redevelopment Aythority : <http://www.ura.gov.sg/>
- 3) 原文：「musealisation is the operation of trying to extract, physically or conceptually, something from its natural or cultural environment and giving it a museal status, transforming it into a musealium or 'museum object', that is to say, bringing it into museal field.」
  - 4) 原文：「as a scientific process, necessarily includes the essential museum activities: preservation (selection, acquisition, collection management, conservation), research (including cataloguing) and communication (via exhibition, publications, etc.)」
  - 5) 原文：「In case of museums, 'musealisation' means the conceptual and usually also physical transfer of objects from the 'primary context' to the museological context'. 'museality' refers to the meanings attributed to objects which are the cause the process of musealisation, or which are the result from this process」
  - 6) 本概念図は、堀江典子、平松玲治 (2010) 「公園の博物館化に関する一考察」博物館雑誌第36巻第1号 P61から引用した。
  - 7) 原文：「The museum's architectural articulation is here seen to oscillate between two paradigms: monument and instrument. These also define the complex relationship of content and container played out in the dialogue between functional and aesthetic considerations that is crucial to an understanding of museum architecture.」
  - 8) 1993年からはじまった National Heritage Board の国家博物院発展計画である。

#### 注

- 1) 建築物 (building)：土地に定着しており、人間の居住その他の目的で作られた空間を構成する物体 (土肥博至、2009)。
- 2) 参照シンガポール遺産局：<http://www.museums.com.sg/museums/members/> (2011年5月14日)

## つなげる鑑賞法を利用した 博学連携授業の実践

総合研究大学院大学

奥本 素子

### 1. はじめに

博物館という学習環境を学校教育に活用しようという試みは博学連携と呼ばれ、近年注目を集めている（小川、堀田 2007）。平成10年に告示され、平成15年に一部改正された学習指導要領では、総合的学習の時間において、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。」という文言が新たに加わり、授業における博物館の利用が積極的に推奨されている。特に小学校の図画工作の鑑賞のカリキュラムにおいては、「各学年の『B鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用すること。」とあり、美術鑑賞カリキュラムにおいては美術館は学習資源の一つとして位置付けられている。

美術館を含め、博物館での学習はカリキュラムや教科書のない、来館者中心の学習である。そのような学習はInformal Learning (Lord 2007) やFree-Choice Learning (Falk and Dierking 2000) と呼ばれ、博物館学習の特色の一つとされている (Patchen and Rand 2007)。一方で、博物館学習に不慣れた博物館初心者が、上記のような学習環境の中で支援なしに自立的に学習することは困難であることも指摘されている (Falk and Dierking 1992)。しかし、我が国では欧米のような教育専門の学芸員制度が整っておらず (岩崎ほか 2002)、博物館側の学習支援が不足しており、学校が求める学習との間に隔たりがあることが指摘されている (岩代 2003、今田 2005)。特に美術館を活用する授業においては、学校側は「事前学習が不十分で絵画鑑賞が未消化」だと考えており、多くの美術館が「事前教育のための資料類が未整備」だと認識している (石川 2001)。

### 2. つなげる鑑賞法

美術館を鑑賞教育の学習資源として、有効に活用するためには、美術館の学習資源を児童・生徒が自立的に活用する能力を、事前に育成する必要がある。先行研究によれば、自立的な博物館鑑賞者はまず

各展示資料の意味を読み解き、資料間のつながりを発見して、より抽象的な展示全体のテーマに気が付くという学習プロセスをとるという (Hooper-Greenhill 2000)。しかし、実際には抽象的な視点や、展示資料の意味を読み解くための注目点の把握は、初心者には難しいとされている (奥本、加藤 2009)。奥本ら (2009・2010) は、初心者が苦手な抽象的視点と展示資料の注目点を理解させるために、作品同士の関連性と、関連作品に共通する鑑賞方略を教授するという、先行研究で考えられている鑑賞過程とは反対の鑑賞教育を行った。すると学習者は自立的に作品を解釈するようになった。本研究では、奥本らが提案した鑑賞法を、つなげる鑑賞法と命名した (図1)。

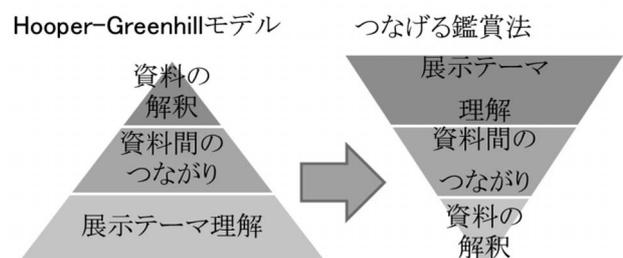


図1 つなげる鑑賞法のコンセプト

### 3. つなげる鑑賞法の博学連携への活用

本研究はつなげる鑑賞法を博学連携の事前学習に活用し、その効果を検証した。まずつなげる鑑賞法を元に、つなげる鑑賞法の教授を行う教材、つなげる鑑賞教材を開発した (図2)。本研究では、千葉県立美術館と千葉県の小学校の協力を得て、千葉県立美術館訪問を伴うつなげる鑑賞法を活用した事前学習プログラムを実施し、その効果を検証した。実験



図2 つなげる鑑賞教材

に協力してくれたのは、M小学校の小学3年生（児童数21名）のクラスである。事前学習の授業時間は2コマ（45分×2）で、一か月後美術館を訪問し、60分の展示室鑑賞を体験した（表1）。

表1 授業の流れ

活動	時間	教室	利用教材	教師	児童／生徒
*先生と一緒につなげる鑑賞教材を見てみよう	10分	パソコン室	つなげる鑑賞教材	前でつなげる鑑賞教材の中から代表的な作品解説を2点紹介し、授業の動機づけ、教材の見方、学習の観点、教材利用の方法などを説明する。	教師の説明を聞きつつ、教師からの問いかけに答えていく。
*自分でつなげる鑑賞教材を使ってみよう	15分	パソコン室	つなげる鑑賞教材	児童／生徒のサポート	実際に教材を利用する。
トイレ休憩と教室移動（5分）					
*つなげるマップを作ろう	35分	教室	ワークシート・シール	児童／生徒のつなげるマップ作製をサポート	教材で学習したことを参考に風景面つなげるマップを作成
*お互いのつなげるマップについて話し合おう	15分	教室	作成したワークシート	児童／生徒の話し合いをサポート 面白い議論を記録する	4人程度で班を作り、互いのタンケンマップを比較し、話し合う
*クラス全体のまとめ	10分	教室		各班の話し合いの状況をまとめる	各班の代表者が話し合いで一番心に残ったことを発表する
*美術館訪問	60分	展示室		児童／生徒のサポート	2人一組になって、対話をしながら展示室で作品を鑑賞していく

#### 4. 評価

事前学習前後と美術館での鑑賞後の意識の変化を見るために、同じ質問紙を使って調査した。その結果、いくつかの項目で、事前、事後、鑑賞後に有意な差があった（表2）。

まず、事前学習後は「わざわざ美術館に行くのは面倒くさい」という美術館訪問に対する動機づけが低下するのに対し、鑑賞体験後ではその動機づけが

高まるため、鑑賞体験によって美術館訪問の動機づけは高まると考えられる。

また「絵を見る前に、絵のことを知ってしまうと、つまらなくなるとおもう」という事前学習への否定的意見は事前学習後に低下し、鑑賞後さらに低下する。この結果から、事前学習は事前学習に対する否定的な意見を低下され、その意識は美術館訪問によってさらに強化されると考えられる。

表2 事前学習前後・鑑賞後の質問紙の結果

	事前		事後		鑑賞後		F 値
	$\bar{x}$	S.D.	$\bar{x}$	S.D.	$\bar{x}$	S.D.	
絵を見てみたい	3.65	0.59	3.70	0.66	3.80	0.41	3.00
わざわざびじゅつかんに行くのはめんどくさい	1.80	1.01	2.10	1.29	1.15	0.37	8.86**
ちばけんりつびじゅつかんをよくしりたい	3.56	0.19	3.61	0.14	3.78	0.10	0.56
絵を見る前に、絵のことを知ってしまうと、つまらなくなるとおもう	3.10	1.25	2.20	1.24	2.25	1.45	5.41*
絵を見ると、ちゅうもくしたいポイントがある	2.90	1.02	3.45	0.76	3.45	0.83	2.46
びじゅつかんにかざられている絵にはりゆうがある	3.70	0.57	3.60	0.82	3.55	1.00	0.29
びじゅつかんはとりあえず高い絵がかざってある	2.20	1.20	2.65	1.09	3.05	1.05	4.281*
びじゅつかんではじぶんで次に見る絵をえらびたい	2.95	1.00	3.55	0.69	2.85	1.27	4.85*
びじゅつかんで絵を見るときは、思いついたまま、ばらばらに見る	1.40	0.75	1.45	0.69	1.50	0.83	0.08
絵の前に立つと、何をどうみたらいいのか迷ってしまう	2.90	0.85	2.50	1.15	2.00	1.08	5.73*

$p^* < .05$ ,  $p^{**} < .05$

また、「絵を見るとき、注目したいポイントがある」という項目では、事前学習の際に肯定的割合が増え、鑑賞後もそれが持続されていた。よって、事前学習の注目点の教授が鑑賞後も保持されていたと考えられる。加えて、「絵の前に立つと、何をどうみたらいいのか迷ってしまう」という項目は、事前学習後に低下して、さらに鑑賞後には事前学習前と比べ有意に低下している。事前学習、美術館鑑賞体験を通じて、学習者は作品を見る視点を確立していったということが示唆された。一方、「美術館では自分で次に見る絵を選びたい」では、事前学習後は有意に肯定的割合が高くなったが、鑑賞後はそれが低下している。これは事前学習では絵を見る順番を決めていたにもかかわらず、鑑賞中は展示室の動線に従ってしまった結果だと考えられる。実際の展示室では多くの児童が順番通り、展示作品を見ていった。この結果から、事前学習では鑑賞視点の獲得には効果的だが、動線支援には不十分だということが考えられる。加えて、展示テーマの獲得の有無を聞くための「美術館はとりあえず高い絵がかざってある」という項目では、美術館では展示テーマに関係なく高い絵が飾ってあるという意識が事前学習後に高くなり、さらに鑑賞後にはさらに高くなるという結果になった。これは質問の立て方が誤解を与えたものと考え、テーマのあるなしについては別の質問で聞いた方がふさわしいと考えられる。

## 5. まとめ

本調査の結果、つなげる鑑賞法を活用した事前学習の効果と、その後の美術館鑑賞の効果が明らかになった。まず情意面においては、事前学習は絵を見る前に絵について知るという事前学習への肯定的意見を増加させるが、実際の美術館訪問への動機づけは行うことができない。しかし実際の美術館訪問はその後の美術館訪問への動機づけに効果的である、ということが分かった。

また事前学習としてのつなげる鑑賞法は、視点の確立に効果的であることが分かったが、どの作品から見るかといった動線支援の効果を高めるためには、館内でさらなる支援が必要であることが明らかになった。

今後は上記の結果を踏まえて、質的な観点から、つなげる鑑賞法の効果について検証していく必要があると考える。

## 参考文献

- Falk, G. H. & Dierking, L.D. (1992) "The museum experience" Howells House, Washington
- Falk, G. H. & Dierking, L.D. (2000) "Learning from museums" Altamira Press, Lanham
- 石川誠 (2001) 学校と美術館の連携に関する考察 I: 美術館教育普及担当者への調査から, 美術科教育学会誌 (22), 13-28
- 岩城卓二 (2003) 歴史教育と博物館『歴史展示とは何か』, 国立歴史民俗博物館, 155-190
- 岩崎公弥子, 安田孝美, 横井茂樹 (2002) ミュージアムと学校の連携による高速通信回線を利用した天体教育の実践と評価, 教育システム情報学会誌, 19 (1), 13-21
- Lord, G. D. (1997) "The Manual of Museum Management" Altamira Press, Oxford
- Patchen, J. H. and Rand, A. G. 2007 Fostering Effective Free-Choice Learning Institutions: Integrating Theory, Research, Practice and Policy Making, Falk, J. H, Dierking, L. D. Foutz, S. "In principle, in practice: museums as learning institutions", 167-180, Altamira Press, Lanham
- Hooper-Greenhill, E (2000) Museums and the Interpretation of Visual Culture, Routledge
- 今田晃一 (2005) 国立民族学博物館ハンズ・オン「ものの広場」を活用した学習プログラムの開発と実践 I (理論編): 博物館展示資料への材料からのアプローチ, 国立民族学博物館調査報告56, 83-151
- 小川雅弘, 堀田龍也 (2007) 歴史系博物館展示を効果的な学習材とするための展示手法の研究, 日本教育情報学会年会論文集 (23), 210-211
- 奥本素子, 加藤浩 (2009) 美術館学習初心者のための博物館認知オリエンテーションモデルの提案, 日本教育工学会論文誌33 (1), 11-21
- 奥本素子, 山田政寛, 加藤浩 (2009) 博学連携活動における事前学習教材の開発と利用—博物館認知オリエンテーション教材を利用した事前学習, 博物館学雑誌35 (1), 97-115

## 長崎歴史文化博物館における地域連携・教育事業の成長プロセスのモデル化

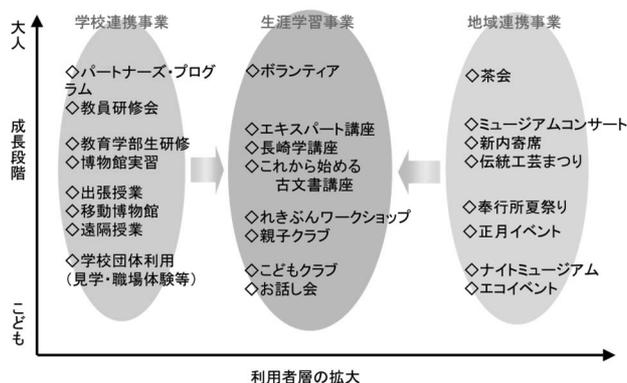
長崎歴史文化博物館 教育グループ

竹内 有理・加藤 謙一  
久保 憲司・下田 幹子  
一瀬 勇士

長崎歴史文化博物館では、2005年11月の開館以来、「成長、発展する博物館」を目標に掲げ、こどもから大人まで幅広い層を対象とした様々な教育事業を展開してきた。その数は本数にして年間100本以上にもものぼる。集客や成果などが想定した通りにいかなかったもの、非常に好評だったものなど様々であるが、試行錯誤しながら後ろを振り返る暇なく、前進し続けてきたという感がある。開館して5年を経た今、これまでの活動を館全体の活動のなかに戦略的に位置づけなおし、さらなる事業の拡大と各教育プログラムの質の向上をめざす必要性を感じている。本報告では、当館で実施している教育事業を博物館と利用者の成長プロセスという視点から分析、類型化した事業モデルを紹介する。

当館では、教育事業を以下の3つのカテゴリに区分している。一つは学校を対象とした「学校連携事業」、二つめはこどもから大人まで生涯を通じた学習の機会を提供する「生涯学習事業」、三つめは地域住民が主体となって行うものや、利用者層の拡大を目的に行う「地域連携事業」である。各事業をこれら3つのカテゴリに分類してプロットしたのが図1である。縦軸は、年齢の成長段階を示している。横軸は利用者層の広がり示している。

なお、ここに記した事業は、毎年実施しているいわば定番メニューとして定着したものであるが、これら以外に、企画展と関連づけた講座やイベントなど、単発で行う様々な種類の事業を行っている。以下に主な事業の概要と目的を記す。



### ○学校連携事業

学校向けの教育プログラムは、地域との連携、こどもの学習機会の提供、将来の博物館ファンの育成という意味からも極めて重要な事業といえる。学校団体の利用を増やし、その期待に応えるには、いろいろな方法で学校に働きかける必要がある。

学校団体が来館したときの対応としては、ボランティアや教育担当スタッフによる展示の説明やものづくりなどの体験プログラムと組み合わせた展示見学などを行っている。教師との事前の打ち合わせが綿密であればあるほど、学校側のニーズと博物館側の提供物のマッチングが適切に行われた見学プログラムを提供することができる。

学校向けの見学プログラムの検討に大いに役立っているのが、小中高校の教師を対象とした「協力校・パートナーズプログラム」である。これは博物館に対する認識や理解が必ずしも十分でない教師自身に、博物館のおもしろさを知ってもらうために、また、われわれ博物館職員が学校現場の実状やニーズを知るための相互交流の場として始めたものである。開館の翌年に現在のプログラムの前身となる学校利用検討会を発足させ、5年を経た現在、30人の教師が参加、活動する会に成長した。この活動を通して、博物館を使った数多くの特徴ある授業の実践が行われるようになった。博物館と学校の相互協力の賜といえる。次のステップとしては、これらの実践事例を他の学校でも適用できるように見学プログラムをモデル化することである。基本プログラムの提供、もしくは、学校のニーズに合わせてカスタマイズすることができれば、学校利用の機会を増やすことができる。

### ○生涯学習事業

人が生涯を通じて博物館を利用するためには、利用者の成長段階に応じたきめ細かなプログラムを提

供していく必要がある。当館でも開館5年を経て、そのような成長段階に応じたプログラムが徐々に整備されつつある。最年少を対象とした「お話し会」は、未就学児から小学校低学年を対象としたもので、季節毎の長崎の伝統行事にあわせて、ボランティアによる読み聞かせとものづくりを行うプログラムである。「こどもクラブ」は、小学生を対象にしたプログラムで、長崎の歴史や文化をテーマにした7回の連続講座である。1回限りの講座ではなく、連続講座とすることで、参加者の成長をより長期的に支援できるプログラムとした。また博物館職員と参加者との関係も回を重ねるごとにより親密になってきている。次に、「こどもクラブ」を卒業した年齢層の親子を対象にした「親子クラブ」を平成23年度より新しく始めた。博物館の資料に触れながら、親子で長崎の歴史や文化に親しんでもらうメンバー制の連続講座である。

中学生以上から参加できる「れきぶんワークショップ」では、博物館の活動や長崎の歴史文化に親しんでもらう実演や体験を盛り込んだ講座を行っている。その他、大人向けの座学の講座として「これから始める古文書講座」「れきぶん長崎学講座」「エキスパート講座」、館長の「ミュージアムトーク」、市川森一名誉館長奉行所トーク」などを実施している。

さらに博物館との関わり方として、これらの講座に参加したり展示を見に来るといった受益者としての関わり方以外に、サービスを提供するなど、より主体的に博物館と関わるボランティアがある。博物館のボランティアは、ボランティア自身の生涯学習という意味だけでなく、博物館にとっては地域との連携を強化する意味からも重要な存在といえる。



親子クラブ

#### ○地域連携事業

学校向けのプログラムや前述したような生涯学習事業は、博物館のテーマに一定の興味関心を持って

いる人々を対象にした事業で、博物館の教育普及事業の中核をなすものである。それに対し、ここで述べる地域連携事業は、従来の利用者層にとどまらず、幅広い層を取り込むための、あるいは新たな利用者層を開拓するための事業として捉えられる。これらは地域との連携を強化するためにも、欠かせない事業となっている。

地域連携事業としては、地域の音楽家によるミュージアムコンサートや、地域の市民グループによる「伝統工芸まつり」、博物館とボランティア、地域の自治会による「奉行所夏まつり」、市民グループ主催による茶会等を行っている。またこどもを対象とした「ナイトミュージアム」やNPOと連携したエコイベントなどを開催している。

これらの地域連携事業には、長崎の歴史や文化、あるいは企画展のテーマに関連したものもあるが、必ずしもそうではないものも含まれる。どこまで広げるかは慎重にならなくてはならないが、博物館に親しんでもらうイベントとして位置づけている。これらのイベントへの参加をきっかけに、博物館の他の事業にも足を運んでもらいたいというのがねらいである。



長崎伝統工芸まつり

以上、長崎歴史文化博物館で実施している地域連携・教育事業を3つのカテゴリに分けてみてきた。利用者の成長段階に応じたものや、興味関心の度合いに応じたものなど、それぞれの事業に目的や対象がある。博物館と利用者を結びつける回路は多いほどいい。博物館に関わる入り口がどんなものであれ、最終的には、博物館のテーマに関心を持ってもらうことが目標であるが、3つのカテゴリ間の相互連関については、まだ課題も多い。いずれにしても様々な博物館活動を行う際に、経営戦略的にそれらを位置づけ、職員がそれを自覚的に行うことが重要である。生涯を通じて付き合える博物館になるよう、これからも事業の充実と発展に努めていきたい。

## 映画に見るミュージアム

文化庁文化財部美術学芸課長

栗原 祐司

昨年はマンガを活用したミュージアム・リテラシーの向上をテーマに発表したが、広く一般にミュージアムに関する知識・理解を高めるといふ点では、映画やテレビドラマ等でミュージアムを舞台または題材とした作品を放送してもらえば、より高い波及効果が期待できる。実際、これまで国内外で多くの作品が制作されており、今回はそれらを取り上げて考察する。

ミュージアムを舞台または題材とした映画については、概ね①ミュージアムが自ら企画・制作した作品、②ミュージアムに関するドキュメンタリー作品、③ミュージアムをメインのロケ地として使用した作品、④ミュージアムがロケ地として登場する作品、⑤ミュージアム活動を題材・テーマとした作品、⑥マンガ等を原作とするアニメーション作品の6点に分類することができる。以下、この分類に沿って説明することとしたい。

### ①ミュージアムが自ら企画・制作した作品

オルセー美術館は、20周年記念作品として同館の所蔵品を活用したオリヴィエ・アサイヤス監督による『夏時間の庭』(“L'Heure d'été”, 2008)や、台湾との合作で侯孝賢監督による『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』(“Le Voyage du Ballon Rouge”, 2007)を制作している。『夏時間の庭』は、母から遺された美術品を整理する三兄妹とその家族



夏時間の庭 (フランス)

の姿を描いた内容だが、美術品は家の中で日用品や装飾として使われてこそ生き生きとしており、美術館での展示は囚われの状態のように思われ、展示環境について考えさせられる作品である。ルーブル美術館でも、フランス・台湾合作で映画を制作しており、ツァイ・ミンリャン監督による『ヴィザージュ』(“Visage”/“Face”, 2009)は、ルーブル美術館に収蔵する初めての映画となった。台湾では、国立故宮博物院を舞台にしたチェン・ウェンタン監督の『時の流れの中で』(“経過”, 2004)が作られている。蘇東坡の名書「寒食帖」を接点に、それぞれ違う世界で生きる三人の人間模様が描かれており、故宮博物院の歴史を織り交ぜながら、物語が繰り広げられていく。恋愛映画としても楽しめるが、「虚実は一重、時の流れは一つ」という言葉に象徴されるように、台湾に対する理解を深めることのできる作品にもなっている。

このほか、DVDになるが、逸翁美術館が20周年事業として『逸翁 雅俗の精華 小林一三コレクション』(2009)を、札幌市円山動物園が開園60周年記念として『円山動物園の赤ちゃんたち』(2011)を、東京国立博物館が『東京国立博物館—研究員が選ぶ12部門ベスト3』(1990)を制作しているなどの例はあるが、ドラマのようなストーリー性はない。

### ②ミュージアムに関するドキュメンタリー作品

ミュージアムの現場を伝えるドキュメンタリー映画としては、『パリ・ルーヴル美術館の秘密』(“La Ville Louvre”, 1990)やアムステルダム国立美術館の大規模改修工事に関わる過程を描いた『ようこそ、アムステルダム国立美術館へ』(“The New Rijksmuseum”, 2008)が有名だが、エルミタージュ美術



パリ・ルーヴル美術館の秘密 (フランス)

館を舞台に90分ワンカットでロシア史のエピソードをたどる『エルミタージュ幻想』（“Russkiy kovcheg”、2002）等も美術館の在り方や、その作品の保存・活用を考える上で興味深い。動物園や水族館は、生きた資料を扱うという点ではドキュメンタリー作品が数多く作られており、ドイツのベルリン動物園で人工哺育で育てられたホッキョクグマを描いた『クヌート』（“KNUT & FERIND”、2008）は、日本でも放映され話題を呼んだ。『白くまピース ～日本初・人工哺育の全記録～』（2006）は、同様に愛媛県立とベ動物園おける実践を描いたキュメンタリー作品である。

### ③ミュージアムをメインのロケ地として使用した作品

前述の『エルミタージュ幻想』は、まさに全編エルミタージュ美術館がロケ地として使用されており、韓国映画の『美術館の隣の動物園』（“미술관 옆 동물원”、1998）も、ソウル郊外にある国立現代美術館内で映画撮影が許可された作品である。ただ、ストーリーそのものは美術館や動物園に関するものではなく、静的で内気な女性は美術館へ、動的で活気あふれる男性は動物園へというように、登場人物のキャラクターを象徴する意味で使われているように思う。トルコのトプカプ宮殿博物館所蔵の宝剣の強盗事件を描いたアメリカ映画『トプカピ』（“Topkapi”、1964）や、メトロポリタン美術館からモネの絵画を盗み出すアメリカ映画『トーマス・クラウン・アフェア』（“The Thomas Crown Affair”、1999）は、実は別のロケ・セットで撮影されている。沖縄美ら海水族館を舞台にした『ドルフィンブルー—フジ、もういちど宙（そら）へ』（2007）は、岩貞るみ子原作（2005）のドキュメンタリー作品でもある。水族館は、近年

のアクリル樹脂等の技術進歩によって大型化が進み、かなり鮮明かつ幻想的な映像を撮影することが可能になり、『THE AQUARIUM 巨大水槽のある水族館』（2007）や『NHK DVD水族館～An Aquarium～ 沖縄美ら海水族館』（2007）等のDVDシリーズが数多く制作・販売されている。

### ④ミュージアムがロケ地として登場する作品

ミュージアムがロケ地として登場する作品はそれほど星の数ほどある。ルーブル美術館は、ゴッタル監督の『はなればなれに』（“Bande a part”、1964）やエリック・ロメール監督の『パリのランデブー』（“Les Rendez-vous de Paris”、1995）はじめ数多くの映画に登場するが、異色なのはアメリカ映画『大列車作戦』（“The Train”、1964）で、第二次大戦末期、ナチス・ドイツがルーブル美術館から大量の絵画を運び出そうとし、それを知った列車の運転手たちが絵画の奪還を計画するという実際の事件をもとにした作品で、戦時中における博物館資料の保護について考えさせられる。香港映画『海洋天堂 Ocean Heaven』（2010）は、実在する水族館の「青島極地海洋世界」に勤務する主人公が癌で余命わずかであることが判り、自分の死後の自閉症の息子ことを考え悩むという内容で、映像が美しい。我が国では、古くは小津安二郎監督の『麦秋』（1951）で、日曜日に、主演原節子の両親が昼食をとっている場面が東京国立博物館本館前がロケ地として使われている。『GANTZ』（2011）は、奥浩哉によるマンガ作品の映画化だが、同じく東京国立博物館の本館がロケ地として使われ、館内で戦いを繰り広げる。『つぐみ』（1990）は、よしもとばなな原作の小説『TUGUMI』の映画化だが、主演の牧瀬里穂の恋人（真田広之）



美術館の隣の動物園（韓国）



海洋天堂 Ocean Heaven（香港）

が、伊豆の長八美術館の学芸員として登場する。林真理子原作の『東京マリーゴールド』(2001)は、田中麗奈と小澤征悦が東京都写真美術館でデートするというシーンがある。『ちゃんこ』(2006)は、広島大学の相撲部を題材にした作品で、ひろしま美術館でゴッホの「ドービニーの庭」の絵を前に語りあうシーンがあり、広島平和記念資料館もロケ地として使われている。『雪夫人絵図』(1950)は、舟橋聖一の小説を溝口健二監督によって映画化したもので、熱海市指定有形文化財「起雲閣」でロケを行っている。やまさき十三原作、北見けんいちのマンガを映画化した『釣りバカ日誌』では、第12回(1998)で本間美術館や藩校致道館が、第17回(2004)で秋田県立男鹿水族館等がロケ地となっている。テレビ番組の『仮面ライダーW』(2009~10)では、秘密結社の名前が「ミュージアム」で、そのボスである園咲琉兵衛(寺田農)邸が東京国立博物館本館、園咲が館長を務める「風都博物館」が国立科学博物館上野本館という設定になっている。また、深田恭子主演の『富豪刑事』(2005)の第2話「美術館の富豪刑事」では、しもだて美術館(茨城県筑西市)がロケ地となっている。

#### ⑤ミュージアム活動を題材・テーマとした作品

アメリカ映画『ナイト・ミュージアム』("Night at the Museum", 2006, 2009)は、ミラン・トレンク著『夜の博物館』(Milan Trenc "The Night at the Museum")を大幅に脚色したエンターテインメント作品で、ニューヨークの自然史博物館を舞台にしている。この映画は日本国内でも人気を博し、博物館等でも上映されたが、娯楽性を求めるがゆえにミュージアムの展示機能ばかりが強調され、調査研究、

保存、修理等の機能がまったく描かれておらず、ミュージアム・リテラシーの向上にはほとんど寄与しなかったことが悔やまれる。韓国のテレビドラマ『ラブ・トレジャー』("밤이면 밤마다", 2008)は、主人公のキム・ソナが文化財庁文化財事犯取締班の要員で、国立中央博物館が舞台になることも多く、韓国の文化財が日本に流出したという設定で日本でもロケを行っている。ラブ・コメディーだが、文化財の盗難や密輸等がテーマになっているという点では我が国にはないタイプのドラマであろう。我が国では、『旭山動物園物語ーペンギンが空をとぶ』(2009)などの事実をもとに構成した映画・ドラマ作品があり、市民が動物園や水族館の使命や役割を考える上で極めて大きな効果を果たしたと考えるが、残念ながら歴史系博物館や美術館を舞台にした本格的な映画やドラマ等は制作されていない。このほか、『ミュージアム・オブ・ラブ』("Museum of Love", 1996)は、クリスチャン・スレーター監督のアメリカテレビ映画で、恋人に愛想をつかさされた売れない俳優のもとに州立歴史協会の学芸員が現れ、自宅で思い出の品を展示し、捨てられた恋人が主演を演じる「愛の博物館」にしよう持ちかけられる物語である。博物館が舞台になっているわけではないが、「歴史的建造物を現代でも共有できるようにしよう」、「この博物館を20世紀のハムレットの舞台にしよう」という発言には、博物館の一つの可能性を示唆しているようで面白い。

#### ⑥マンガ等を原作とするアニメーション作品

昨年発表したとおり、細野不二彦原作の『ギャラリーフェイク』(2005)や、玖保キリコ原作『パケツでごはん』(1996)、柏原麻実原作『宙のまにまに』



ナイト・ミュージアム (アメリカ)



ギャラリーフェイク



JUJU 『Request』



伊参スタジオ

(2009～10) 等がアニメ化されている。

以上のほか、ロケ地として博物館が使われることは多く、例えば東京国立博物館では、2009年度には延べ60件の映画、テレビ及びプロモーションビデオ等の撮影許可を行っており、その中には前述の映画『GANTZ』やテレビドラマ『仮面ライダーW』のほか、ジャズシンガーJUJUのアルバム『Request』(2010)やゴスペラーズ『ハモリズム』(2010)等のカバージャケットの撮影も行われている。歌手の丹下桜は、『Musees de Sakura』(2010)が国立科学博物館、『VOCALIUM』(2011)が新江ノ島水族館で、それぞれカバージャケットの撮影を行っている。博物館明治村(愛知県犬山市)では、映画やドラマなど様々な撮影が行われており、最近では、『坂の上の雲』(2009～11)や『劔岳 点の記』(2009)などのロケ地となり、そのほかにも聖ザビエル天主堂では、『スパイゾルゲ』(2003)の結婚式シーン、『デビルマン(DEVILMAN)』(実写版、2004)の変身シーン、帝国ホテル中央玄関では、首相官邸や大正時代のブティックとして撮影された。大河ドラマ等のロケ地を目的にNHKの支援も受けて設置された「歴史公園 えさし藤原の郷」(岩手県奥州市)では、『炎立つ』(1993～94)、『天地人』(2009)、『龍馬伝』(2010)など数多くの撮影が行われている一方、テーマパークとしての集客にも成功しており、“みちのくのハリウッド”との異名もある。鎌倉から室町時代にかけて吉備高原一帯にみられた村の様子を、絵巻物や発掘資料をもとに時代考証により再現したテーマパーク「中世夢が原」(岡山県井原市)でも、映画『あずみ2 Death or Love』(2005)やNHK大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』(2003)等の撮影が行われている。「伊参(いさま)スタジオ」(群馬県中之条町)は、群馬県人口200万人記念として製作された映画『眠る男』(1996)の撮影拠点として使用された廃校

になった旧中学校校舎である。中之条町ではこの映画の完成を記念して、ここで使われたセットや、県内各所でロケーションに使われたセットを移築し、「伊参スタジオ公園」として公開している。日本では熱心なファン(愛好家)が、主にマンガやアニメを中心に自分の好きな作品に登場したり縁のある土地を“聖地”と呼び、実際に訪れることがはやっているが(俗に“聖地巡礼”と呼ぶ。)、同じような意味で博物館が“聖地”となれば、若年層を中心に多くの者が博物館を訪れるきっかけとなることが期待される。近年、映画撮影等を誘致することによって地域活性化、文化振興、観光振興を図ろうとする地域が増加傾向にあり、これらの自治体ではフィルム・コミッション(映画等の撮影場所誘致や撮影支援をする公的機関)を組織し、官庁または観光協会の一部署が事務局を担当することが多い。フィルム・コミッションによって博物館がロケ地として使用されることも多く、逆に地方の博物館はこれらのフィルム・コミッションと連携して存在感を高める方策も考えられよう。

博物館が映画やドラマの舞台になることによって、知名度が上がり、親近感をもたせる効果が期待できる。博物館のロケ地としての活用は、博物館に足を運ばせるガイダンス的な機能だけでなく、インセンティブともなり、新規来館者の開拓につながる。市民のミュージアム・リテラシーを高め、展示以外のミュージアム活動を人々に知ってもらうためには、ミュージアムを舞台とした映画やドラマ作品を制作するためのさらなる工夫や、その原作となるマンガや小説等の拡大も必要であろう。国民の文化に対する理解・関心が高まる中で、ミュージアムを“聖地巡礼”の場とする方策を考えていくことが求められる。

## アフタヌーンミュージアム

## 福岡市内3大学博物館見学 報告

JMMA事務局 齊藤 恵理

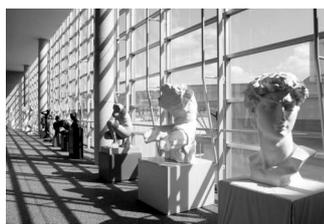
今回の大会は、九州・福岡市での開催となりました。JMMA始まって以来の東京以外での開催ということもあり、アフタヌーン・ミュージアムへの申込者も多く、あっという間に定員の40名がうまりました。訪問先は、大会の会場を提供して下さいました「九州産業大学」の美術館をはじめ、「西南学院大学博物館」、「九州大学総合研究博物館」といった、福岡市を代表する三大学の大学博物館です。バスをチャーターしての、かなりの強行軍となりましたが、福岡市の三大学博物館を一気にめぐるといふ、貴重な体験をすることができました。アート、歴史、自然科学といった、それぞれに大学の特色を打ち出した異なる分野の大学博物館であったところも、このツアーの楽しみとなりました。

最初に訪れたのは、「九州産業大学美術館」。会員の研究発表を終えたあと、早々に食事をすませ、美術館に足を運びまし



た。この美術館は、大学がこれまで収集してきたコレクションを活かし、芸術教育研究に役立てるとともに学外にも公開し、さらに地域の人々の楽しみと学習のための活動を行うための拠点として、2002年4月に公共美術館として発足したということです。調査研究、展示活動だけではなく、大学が有する「ひと・もの・こと」を活用しながら、地域社会の子どもから高齢者までを対象としたワークショップなども積極的に行い、地域の文化芸術振興にも努めているのだそうです。

我々が訪問した時には、「第41回立玄展」が開催されていました。明るめのフローリングの床に、白いウォールといった、ギャラリー空間として使い勝手のよさそうな空間となっており、そこに、多数の力作が展示されていました。コレクションの展示、



教員の作品展示だけでなく、学生の卒業制作の発表の場としても活用されているとのこと。このように、芸術教育研究の場、教員、

学生の活動成果の発表の場であるだけでなく、地域市民に芸術と触れ合い、学ぶ機会を提供する、地域とつながる場としても活用されているという姿に、大学博物館の持つ多様な可能性を肌で感じることができました。



次は、バスに半時間ほど揺られ、「西南学院大学博物館」

へと移動しました。こちらの博物館の建物は、1921年に建設された美しい赤レンガ館で、2006年5月に大学博物館として生まれ変わったとのこと。赤いレンガに扉や窓枠の白が映え、そこに緑の蔦がからまっている様子は、絵葉書のように美しく、参加者はしきりにシャッターをきっていました。福岡市の有形文化財に指定されており、建物自体が貴重な展示物であるということが出来ます。

博物館では、ユダヤ教、キリスト教関係の資料や西南学院の創立者であるC. K. ドージャーにまつわる品々を展示しています。生涯学習の場として、広く社会に開かれた大学博物館を目指し、聖書や教科書に出てきてもふだん目にすることの難しい品々を「目で見て実感」していただけるよう、実物はもちろん、海外にある資料の複製品も含めて展示しています。最も印象に残っているのは、部屋の片隅に展示されている「魔境」で、一見普通の銅鏡のようであるのに、光の反射によってキリスト像を浮かび上がらせます。肉眼では識別できない細かい凹凸によって映し出される仕組みとなっているとのこと。建物の2階には古い講堂があり、1921年から使われているという長イスや八角形の列柱などがそのまま遺されていて、長い時の流れを感じさせてくれます。

さて、一行は、再びバスに揺られて、最後の訪問先、「九州大学総合研究博物館」へと移動しました。

移転をすすめている九州大学の旧敷地は、二つの学部を残し、全ての学部の移動が完了しており、学生たちの姿もなく、閑散としていました。人の気配の消えた巨大なキャンパスは、不思議な魅力をたたえた独特の空間となっていました。

私たちは、あまりにも広大なことからキャンパス内もバスで移動し、指定された建物へと向かいました。着くとそこには、九州大学総合博物館の竹田館長が待っていて下さり、ニコニコしながらあたたかく私たちを迎えてくれました。

九州大学には740万点を越える学術標本・資料が分散して保管されているのだそうです。これらの標本・資料は、国内の大学では随一の規模を誇り、長年にわたり九州大学の教育と研究を支えてきましたが、今後更に新たな共同研究や学際的な研究の出発点となる可能性を秘めているといえます。



常設展示室は、2008年5月、旧工学部本館3階の第9番講義室を改修してつくられました。この展示室では、学内各部局および総合研究博物館に収蔵されている標本・資料の中から考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動植物標本、昆虫標本、技術史資料から特に貴重で興味深い、教育効果の高い標本・資料類を選んで展示を行っています。また、各部局に収蔵されている標本・資料類の概説ポスターの展示も行っており、これらが学内収蔵コレクションのナビゲーションとなり、今後の新たな研究へのアイデアを提供する材料となればと考えているとのことでした。



クラシカルな展示ケースが並び、そこに多様な資料が鎮座している様子は、まさに、博物館の原風景。我々は、知の宝庫であるこの展示空間の中を、竹田館長直々の解説でその奥深い世界へと案内して頂きました。

個人的に印象に残っているのは、古人骨のコレクション。竹田館長曰く、「九大の学生の数より多い」のだそうです。縄文時代から江戸時代までを網羅するこの人骨コレクションは、日本人の形質的变化を研究するうえで、多大な貢献をしたと



のことです。

展示室を出て、次に案内してくれたところは、九州大学総合博物館第1分館倉庫（旧知能機械実習工場）です。ここには、九州大学が開学したころにアメリカから輸入したという、当時の最新工作機器の数々と、なぜか、動物の骨格標本が仲良く並んで設置されています。これらの工作機器は、近年まで稼働していたということです。油の匂いがするほどの暗い空間に、小さな窓から差し込む光がキラキラと光る塵を浮かび上がらせている様子は、廃墟となった工場の置き去りにされた時間を思わせます。館長さんに、「なぜ、工作機械と動物標本と一緒に展示されているのですか」と、特別な意図があるのかと思ひ疑問を投げかけてみたところ、満面の笑みとともに、「いいじゃないですか〜。骨格標本があっても」というお答え。なんだか愉快な気持ちになったことを記憶しています。なんともいえないシュールな魅力に満ちたこの空間は、参加者の方々のアーティスティックな感性を刺激したようで、皆さん、作品を撮ろうとしているカメラマンのようにいろいろなアングルからの撮影にチャレンジしていました。



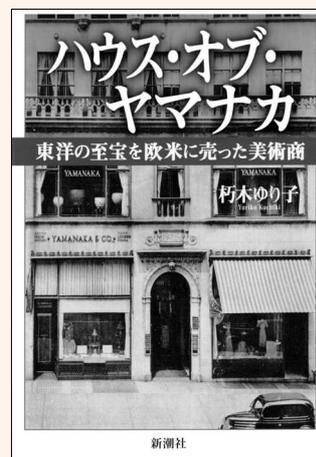
この魅力的な空間には、カフェコーナーも設置されています。空間に浸りながら、ゆったりと寛げるひと時をお客様に提供する場となっています。帰り際にお聞きしたのですが、この年の11月に、この空間で「エリック・サティと夢みる機械」というタイトルで、音楽会を開催するとのことでした。この空間に、エリック・サティはまさにピッタリ。移転完了間近の旧キャンパスを、いろんなかたちで活用しようとしている博物館関係スタッフのキラリと光るセンスの良さを実感しました。



以上、簡単ではありますが、今回のアフタヌーン・ミュージアムを振り返ってみました。末筆となりますが、九州の現地で大会の全体を取り仕切って頂いた吉武理事、企画から各館への交渉、バスガイドまで努めてくださいました九州産業大学の緒方理事はじめとしたスタッフの方々、館内を案内して下さった九州大学総合博物館の竹田館長、三島氏、この場をお借りしまして、心より御礼申し上げます。

## 『ハウス・オブ・ヤマナカ ～東洋の至宝を西洋に売った美術商』

朽木ゆり子（くちき・ゆりこ）著 新潮社刊  
2011年3月25日発行、356頁  
ISBN978-4-10-328951-7 C0070  
定価：2,000円＋税



「ハウス・オブ・ヤマナカ」と、何気に品良く題された本著は、明治から昭和の戦中戦後にかけて欧米を舞台に日本や中国の東洋美術の売買を商いとしながら、文化振興にも努めた「山中商会」という美術商の興亡を描いたものである。大阪に本店のあった同社は、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロンドン、北京にも支店を設け、グローバルに事業を展開していた。だが、「山中商会」と聞いても一般の方はもちろんのこと、この博物館・美術館の世界に身を置く方でも初めて耳にする方は少なくないのではないだろうか。

本著を読み進めてゆくうち、このような美術商が、我が国に存在したことに、あらためて驚きを感じる。日本美術界の祖とも称される岡倉天心をはじめ、モース、ビゲロー、フェノロサといった東洋美術のコレクターとして日本美術界に大きく貢献された方々との取引や交流があった。また、ハヴマイヤー、フォーリア、ロックフェラー、英国王室（日本の企業で英国王室御用達を初めて賜った）といった高名な顧客を持ち、彼らのコレクション収集の一翼を担っていたのである。その後、これら収集品の多くは最終的に、フォーリア美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館など、東洋美術のコレクションで著名な美術館に所蔵されている。

「山中商会」には、当時の取引の記録があま

り残っていなかったことから、著者は先の実術館の納品記録等、膨大であった資料の解読に年月を費やし、山中商会の主にニューヨークにおける活動をひも解かれた。長年の取材活動に頭が下がる想いである。

他に興味深く感じたことは、これら顧客との間で実際にあった手紙のやりとりを紹介されている点である。顧客であり、ニューヨーク支店があった建物のオーナーでもあるロックフェラー一家との手紙のやりとりからは、お互いの信頼関係や、逆に商人としての駆け引きのようなものが感じ取れる。同時に同社解体の要因ともなった世界恐慌や第2次大戦を背景とした当時の状況が垣間見られて実に興味深い。

私自身も、「山中商会」の本店のあった高麗橋1丁目に本籍を残す一人である。祖父は一族の中で「表装」を職としていたと聞いているが、現在、展示（ディスプレイ）の業界に携わる自身としては、「展観」と呼ばれ、商品である美術品を展示しながら、販売していた手法を本著によって改めて知ることができ、嬉しく思っている。

あとがきから感じられるが、続編を期待すると共に、本著と続編をテーマにした企画展・展覧会を開催してみたいものだと、血が騒ぐのである。

（乃村工藝社 山中一文）

# i n f o r m a t i o n

## ◆文献寄贈のお知らせ

- ・公益財団法人多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）  
『共同企画展展示図録「開発を見つめた石仏たち 多摩ニュータウン開発と石仏の移動」』
- ・長崎歴史文化博物館  
『研究紀要 第5号』  
『平成21年度美術館・博物館活動基盤整備支援事業「博物館における海外交流史展示を活用した異文化理解教育プログラムの開発・整備 ～長崎歴史文化博物館の国際交流基盤づくりの一環として～」実施報告書』

## ◆年会費納入のお願い

年会費が未納の方は下記口座までお早めに納入下さいますようお願い申し上げます。  
請求書・領収証等が必要な方は事務局までご連絡下さい。

なお、個人会員の皆様は、トラブル防止のため、お振込みの際は必ずご登録のお名前を明記のうえ、ご入金下さい。

郵便局 口座番号 00160-9-123703  
「日本ミュージアム・マネジメント学会」  
みずほ銀行 稲荷町支店 普通預金 No.1740890  
「日本ミュージアム・マネジメント学会」

u o i t a m i o j u i  
i n f o r m a t i o n

## 新規入会者のご紹介

### 【個人会員】

大場 郁代	武蔵大学	藤田 千織	東京国立博物館
疋田 徳次	磐田市香りの博物館	水崎 禎	東海大学

(五十音順・敬称略)



シミズ、未来を建設中。



ビルの屋上や壁を緑でいっぱいしたり、太陽光パネルの窓でエネルギーをつくったり。私たちが今、取り組んでいるのは、最先端の省エネ技術や再生可能エネルギーを利用して、CO<sub>2</sub>排出量を限りなくゼロにするゼロ・カーボン・ビルです。使うひとにも快適で、自然災害に強く、周辺環境や地球にやさしく。

清水建設は、今日も未来をつくっています。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION  
**清水建設**

清水建設株式会社 〒105-8007 東京都港区芝浦一丁目2番3号 Tel. 03 (5441) 1111 <http://www.shimz.co.jp/>

### 日本ミュージアム・マネージメント学会法人会員 (2011年12月現在)

株式会社アートプリントジャパン  
アクティオ株式会社  
(財) 阿蘇火山博物館 久木文化財団  
株式会社江ノ島マリンコーポレーション  
独立行政法人 科学技術振興機構 日本科学未来館  
カロラータ株式会社  
交通科学博物館  
佐賀県立宇宙科学館  
財団法人竹中大工道具館  
公益財団法人 多摩市文化振興財団  
株式会社丹青研究所  
株式会社丹青社  
つくば科学万博記念財団  
東京家政学院大学

東京家政大学文学部心理教育学科  
株式会社トータルメディア開発研究所  
内藤記念くすり博物館  
長崎歴史文化博物館  
株式会社西尾製作所  
株式会社乃村工藝社  
株式会社文化環境研究所  
株式会社文化総合研究所  
ミュージアムパーク茨城県自然博物館  
公益財団法人山梨県青少年協会 (山梨県立科学館)  
UCCコーヒー博物館  
早稲田システム開発株式会社

(五十音順・敬称略)

学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No. 62 (Vol. 16 no. 3)

発行日 2011年12月31日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、津久井真美 HP: <http://www.jmma-net.jp/index.html> e-mail: [kanri@jmma-net.jp](mailto:kanri@jmma-net.jp)